貝塚市埋蔵文化財発掘調査報告 第49集

貝塚市遺跡群発掘調査概要21

1999. 3. 31

貝 塚 市 教 育 委 員 会

はじめに

わが貝塚市は、北に波静かな大阪湾、南に緑豊かな和泉山脈に接し、恵まれた自然環境を有する地域であります。市内各所には様々な遺跡が存在します。

これらは貴重な歴史的・文化的遺産であり、後世に伝えるために保護することは、現在に生きる私たちに与えられた義務であります。しかし、近年の都市化の波による各種開発はこれらを破壊の危機にさらしています。

今回報告いたします調査もこうした開発行為に伴う緊急調査ではありますが、幾多の成果を得ることができましたので、ここに平成10年度中に実施しました市内埋蔵文化財緊急発掘調査結果の一部を報告いたします。

本書刊行にあたりまして、皆様の文化財に対するご理解を深めて頂くとともに、文化財の保護、保存、研究の一助となれば幸いに存じます。

なお、調査並びに本書作成にあたり、関係各位には多大なご理解、ご協力を頂き、ここに深く感謝申し上げますとともに、今後とも本市文化財保護行政に対する一層のご理解とご支援をお願いする次第であります。

平成11年3月31日

貝塚市教育委員会
教育長　福　井　昱　彦

例　　言

1，本書は、貝塚市教育委員会が平成10年度に国庫補助金を受けて実施した、大阪府貝塚市域における埋蔵文化財緊急発掘調査の概要報告である。

なお、遺物整理の都合から一部平成９年度調査についても掲載している。

2，発掘調査は貝塚市教育委員会教育部社会教育課文化財係、学芸員前川浩一、上野裕子、木嶋崇晴が担当し、平成10年４月１日より調査を実施し、平成11年３月31日に終了した。

また、現地・内業調査及び本書作成にかかる諸作業については、下記の諸氏の参加を得て実施した。

稲田宏美　　南　明美

3，本書の執筆、編集は前川が行った。

4，出土遺物、調査記録は貝塚市教育委員会にて保管している。

目　　次

はじめに
例　　言
目　　次（本文目次、図版目次、挿図目次）

平成10年度調査の概要 …… 1
Ⅰ　貝塚寺内町遺跡（97-49区）の調査 …… 6
Ⅱ　貝塚寺内町遺跡（98-2区）の調査 …… 7
Ⅲ　貝塚寺内町遺跡（98-7区）の調査 …… 8
Ⅳ　津田北遺跡（98-5区）の調査 …… 9
Ⅴ　津田北遺跡（98-13区）の調査 …… 10
Ⅵ　海塚遺跡（98-3区）の調査 …… 11
Ⅶ　加治・神前・畠中遺跡（98-12区）の調査 …… 12
Ⅷ　沢城跡（98-17区）の調査 …… 13
Ⅸ　森下代遺跡（98-22区）の調査 …… 14
Ⅹ　清児遺跡（98-24区）の調査 …… 15
Ⅺ　東遺跡（98-25区）の調査 …… 16
Ⅻ　半田遺跡（98-26区）の調査 …… 17
　1、位置と環境 …… 17
　2、調査の概要 …… 18
　3、検出遺構 …… 18
　4、出土遺物 …… 22
　5、まとめ …… 26

図版目次

図版１　貝塚寺内町遺跡（97-49区）
　１、調査区全景
　２、ＳＫ－２
図版２　貝塚寺内町遺跡（98-２区）
　１、第１区全景
　２、第２区全景
図版３　貝塚寺内町遺跡（98-７区）
　１、調査区全景
　２、堆積状況
図版４　津田北遺跡（98-５区）
　１、調査区全景
　２、堆積状況
図版５　津田北遺跡（98-13区）
　１、調査区全景
　２、堆積状況
図版６　海塚遺跡（98-３区）
　１、遺構検出状況
　２、遺構完掘状況
図版７　加治・神前・畠中遺跡（98-12区）
　１、調査区全景
　２、堆積状況
図版８　沢城跡（98-17区）
　１、調査区全景
　２、堆積状況
図版９　森下代遺跡（98-22区）
　１、ＳＤ－２
　２、ＳＤ－１
図版10　清児遺跡（98-24区）
　１、調査区全景
　２、同　　上
図版11　東遺跡（98-25区）
　１、調査区全景
　２、堆積状況
図版12　半田遺跡（98-26区）
　１、ＳＤ－２０１第２層上面
　２、ＳＤ－２０１第４層上面
図版13　半田遺跡（98-26区）
　１、ＳＤ－２０１完掘
　２、ＳＤ－２０１堆積状況
図版14　半田遺跡（98-26区）
　１、第３区完掘状況
　２、同　　上

挿図目次

図１　貝塚市遺跡分布図（部分）
図２　調査地位置図
図３　調査地位置図
図４　調査地位置図
図５　貝塚寺内町遺跡（97-49区）調査区配置図
図６　貝塚寺内町遺跡（98-２区）調査区配置図
図７　貝塚寺内町遺跡（98-７区）調査区配置図
図８　津田北遺跡（98-５区）調査区配置図
図９　津田北遺跡（98-13区）調査区配置図
図10　海塚遺跡（98-３区）調査区配置図
図11　加治・神前・畠中遺跡（98-12区）調査区配置図
図12　沢城跡（98-17区）調査区配置図
図13　森下代遺跡（98-22区）調査区配置図
図14　清児遺跡（98-24区）調査区配置図
図15　東遺跡（98-25区）調査区配置図
図16　半田遺跡（98-26区）調査地位置図
図17　半田遺跡調査区配置図、土層図
図18　半田遺跡第２、３区遺構配置図、土層図
図19　ＳＤ－２０１出土土器
図20　ＳＤ－２０１出土土器
図21　ＳＸ－３１２出土遺物
図22　ＳＸ－３１２出土土器
図23　SX-311(30)、Pit-302(31、32)
　　Pit-321(33)、SX-613(34)出土土器

表 目 次

表１　平成10年国庫補助事業調査一覧

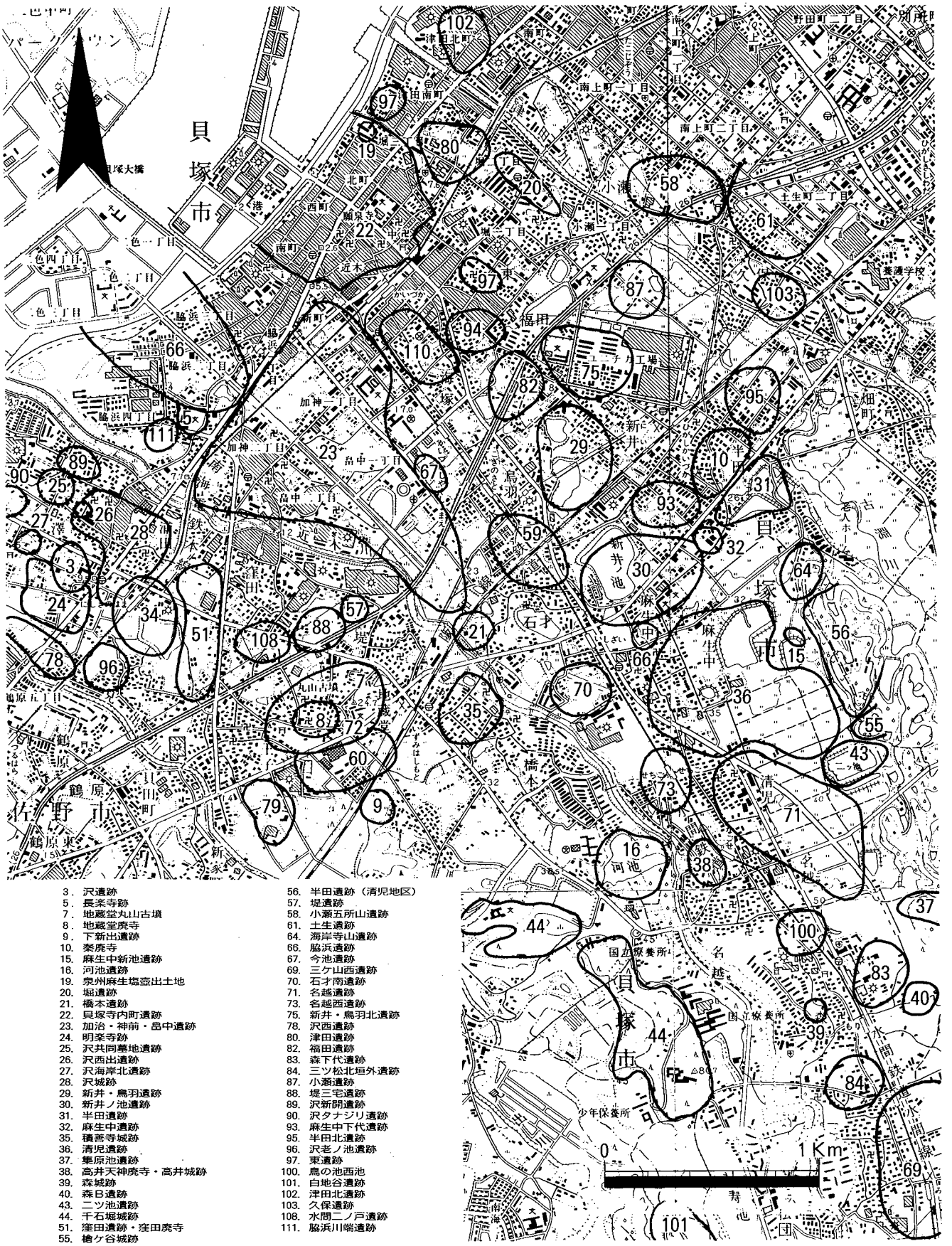
平成10年度調査の概要

平成10年は埋蔵文化財発掘届出書提出数203件、遺跡外調査依頼23件を数える。届出書は平成元年以降、波はあったものの増加し続けていたが、本年大きく落ち込み、バブル経済期からの事業は確実に落ち着いたと考えられる。

発掘調査は届出書にかかるもの35件（本調査５件、試掘調査30件）を数え、国庫事業として下記のとおり発掘調査を実施した（試掘調査の内11件)。実施件数はそれ程多いものではない。理由としては、開発・建築の多い本市西部において、下水管敷設工事が進んだことが挙げられる。建設時に下水管直結配管を行い、浄化槽・便槽を設置せず、遺構面まで達しない工事にて建設が終了する物件が増加したためである。共同住宅建設等に対する調査は19件を数えるものの、これらの建設も小規模なものであり、本調査に至ったのは１件のみである。遺跡外の試掘調査は12件を数えるが、こちらも遺跡の新規発見には至らないものであった。

番号	遺　跡　名	調査番号	調　査　地	備　考
	（平成９年度）			
1	貝塚寺内町遺跡	97－49ＪＮ	中825－１他	本書掲載
	（平成10年度）			
2	貝塚寺内町遺跡	98－２ＪＮ	北町122－66	本書掲載
3	海塚遺跡	98－３ＵＤ	海塚307－１	本書掲載
4	津田北遺跡	98－５ＴＤＫ	津田北106－２	本書掲載
5	貝塚寺内町遺跡	98－７ＪＮ	北町358－１	本書掲載
6	加治・神前・畠中遺跡	98－12ＫＫＨ	石才149－５	本書掲載
7	津田北遺跡	98－13ＴＤＫ	津田北95－２	本書掲載
8	沢城跡	98－17ＳＪ	沢1149－１	本書掲載
9	森下代遺跡	98－22ＭＳ	森432－３	本書掲載
10	清児遺跡	98－24ＳＧ	麻生中231－２	本書掲載
11	東遺跡	98－25ＨＧ	東６－５	本書掲載

表１　平成10年　国庫補助事業一覧（平成10年１月～12月）



3．沢遺跡
5．長楽寺跡
7．地蔵堂丸山古墳
8．地蔵堂廃寺
9．下新出遺跡
10．秦廃寺
15．麻生中新池遺跡
16．河池遺跡
19．泉州麻生塩壺出土地
20．堀遺跡
21．橋本遺跡
22．貝塚寺内町遺跡
23．加治・神前・畠中遺跡
24．明楽寺跡
25．沢共同墓地遺跡
26．沢西出遺跡
27．沢海岸北遺跡
28．沢城跡
29．新井・鳥羽遺跡
30．新井ノ池遺跡
31．半田遺跡
32．麻生中遺跡
35．積善寺城跡
36．清児遺跡
37．集原池遺跡
38．高井天神廃寺・高井城跡
39．森城跡
40．森B遺跡
43．二ツ池遺跡
44．千石堀城跡
51．窪田遺跡・窪田廃寺
55．槍ケ谷城跡
56．半田遺跡（清児地区）
57．堤遺跡
58．小瀬五所山遺跡
61．土生遺跡
64．海岸寺山遺跡
66．脇浜遺跡
67．今池遺跡
69．三ケ山西遺跡
70．石才南遺跡
71．名越遺跡
73．名越西遺跡
75．新井・鳥羽北遺跡
78．沢西遺跡
80．津田遺跡
82．福田遺跡
83．森下代遺跡
84．三ツ松北垣外遺跡
87．小瀬遺跡
88．堤三宅遺跡
89．沢新開遺跡
90．沢タナジリ遺跡
93．麻生中下代遺跡
95．半田北遺跡
96．沢老ノ池遺跡
97．東遺跡
100．鳥の池西池
101．白地谷遺跡
102．津田北遺跡
103．久保遺跡
108．水間二ノ戸遺跡
111．脇浜川端遺跡

図１貝塚市遺跡分布図（部分）

98－13地点
98－ 5 地点
南海本線
98－ 2 地点
98－25地点
98－ 7 地点
97－49地点
南海貝塚駅
98－ 3 地点
0
500m

図２　調査地位置図

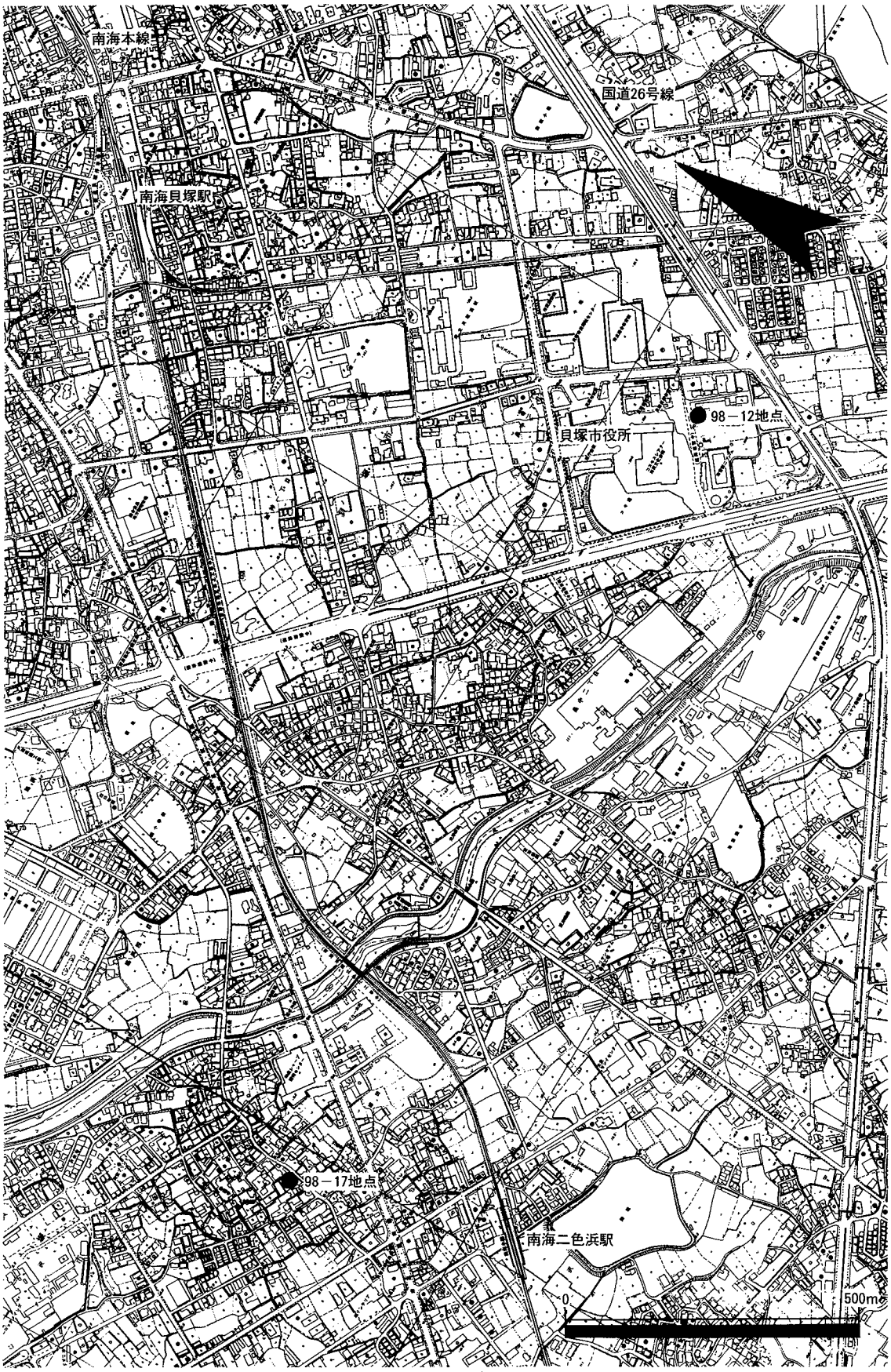


図3　調査地位置図

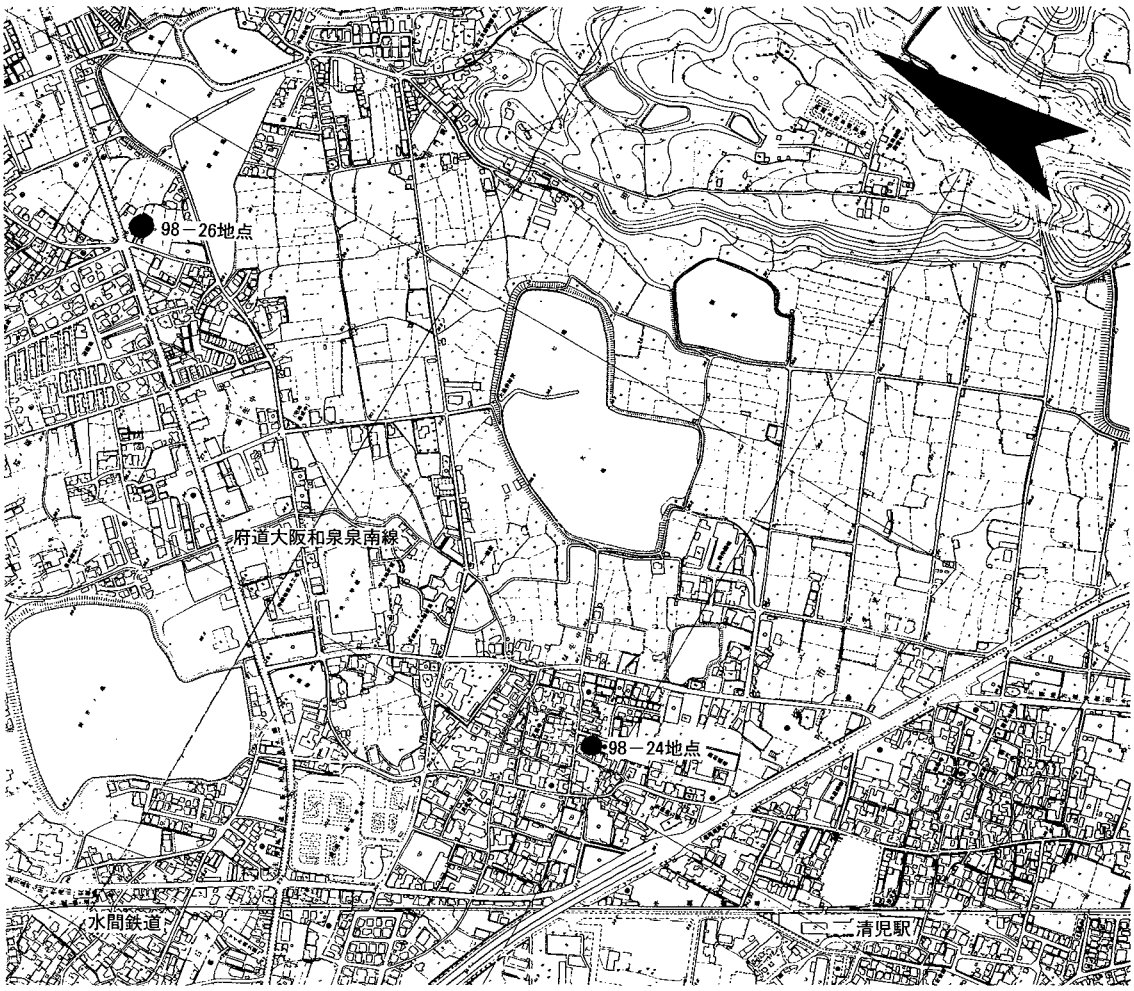


図４　調査地位置図

Ⅰ　貝塚寺内町遺跡（97-49区）の調査

貝塚寺内町遺跡は貝塚市北部の大阪湾に面し、砂堆部から中位段丘端部にかけての海抜２～９ｍを測る地点に位置する。北側は北境川、南側は清水川、東側は南海本線までの部分がその範囲である。北東～南西約800ｍ、南東～北西約550ｍを測る。寺内の中心寺院は願泉寺であり、近世には願泉寺住職「卜半」が寺内地頭として、絶大な支配力を誇った。今回の調査地は貝塚市中825－1である。現状標高は8.04～8.46ｍを測り、北から南にかけて低くなっていく。

建設計画にもとづき、建設予定地内北部に、東西方向（1.5×7.5ｍ）の調査区を設定し、調査を実施した。調査区の層序は３層に分別できる。第１層暗茶色土（層厚0.4ｍ）、第２層暗黒茶色土（層厚0.4ｍ）、その下が地山である黄色粘土である。出土遺物が少ないため確定できないが、両層は近代以降に整地されたものと見られる。遺構は第２層上面から切り込む井戸、地山面では便所１、落ち込み２を検出した。井戸ＳＫ－１は断面での確認では堀方直径2.6ｍを測り、北よりに瓦による井戸枠を設置する。井戸直径は0.8ｍを測る。完掘しなかったため深さは不明である。堀方埋土は淡黄色細砂、井戸内は黒灰色土である。落ち込みＳＸ－１、２は調査区に対して直行する形で検出したため、１が幅2.2ｍを測る以外、規模は不明である。また、深さについても完掘しなかったため不明。埋土は共に黒灰色土である。ＳＫ－２は便所である。大谷焼鉢を埋め、その上を漆喰で固める。最上部は破壊されているので本来の規模は不明であるが、上部直径1.2ｍ、深さ0.5ｍを測る。（図２、５、図版１）

遺物は、ＳＫ－１堀方は肥前磁器染付碗、ＳＫ－２堀方は透明釉土師器皿、肥前系染付碗、瀬戸染付碗、瓦片、第２層は和泉音羽焼土瓶、湯飲み、瀬戸磁器染付碗、土師質焙烙が出土した。

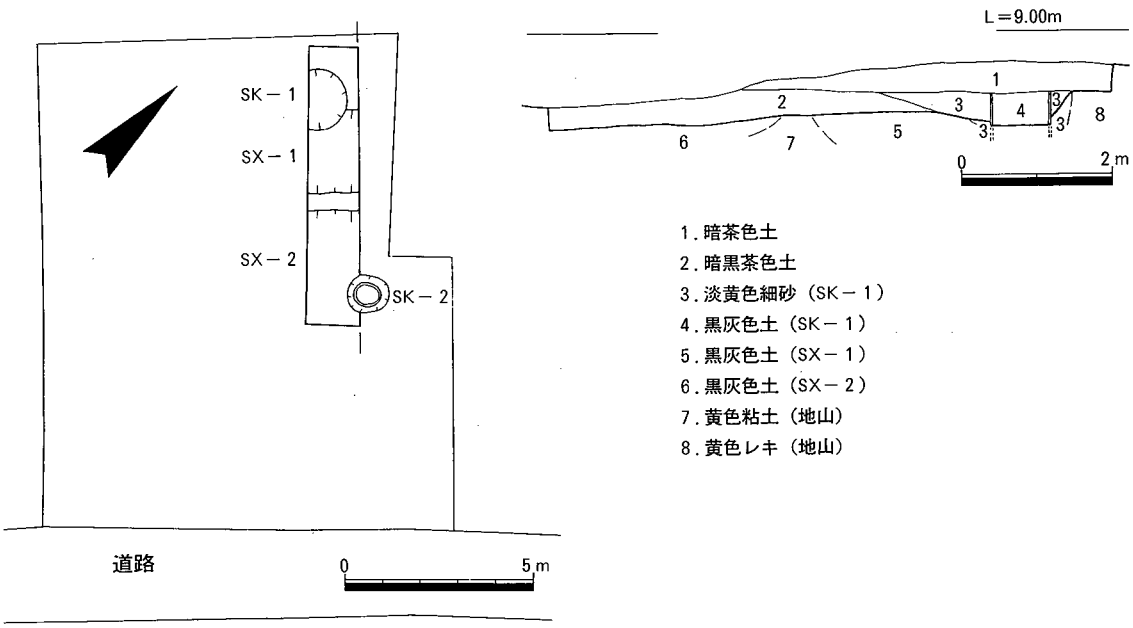


図５　貝塚寺内町遺跡（97－49）調査区配置図

Ⅱ　貝塚寺内町遺跡（98-２区）の調査

遺跡の概要については、前章のとおりである。今回の調査地は貝塚市北町122－66でり、段丘端部に位置し、現状標高は約６ｍを測る。（図２、６、図版２）

建設計画にもとづき、建設予定地内北、南部に、南北方向（第１区、1.5×5.5m）、東西方向（第２区、1.8×2.5m）の２ヶ所の調査区を設定し実施した。調査区の層序は３層に分別できる。第１層盛土（石炭ガラ、層厚0.4m）、第２層淡灰色細砂（層厚0.4m）、その下が地山となる黄色粘土（同色細砂混）である。出土遺物が少ないため確定できないが、両層は近代以降に整地されたものと見られる。第１区については、掘削深度が深くなったため、地山を検出せず掘削を断念した。第２区については層序は確認できたが、遺構は存在しない。

調査前は現地北端部分が段丘端部の崖との理解であった。本寺内には各所に段丘崖が存在しており、本調査地もその一つとしていた。しかし、調査の結果、調査地自体が段丘端部の傾斜地であることが判明し、近代以降に大幅な造成により地形変更されていることが確定した。

寺内には各所に段丘崖が存在するが、何れも住宅が密集し、その状況確認は十分ではない。表面的に観察したことから理解するのが現状であり、今回の成果はこの様な安易な理解に対する警鐘となった事の意義は大きい。

遺物は盛土内より瀬戸磁器染付碗、新製焼皿、肥前系磁器染付碗、和泉音羽焼鉢が出土したが、大部分は近代以降のプリントによる染付磁器が占める。

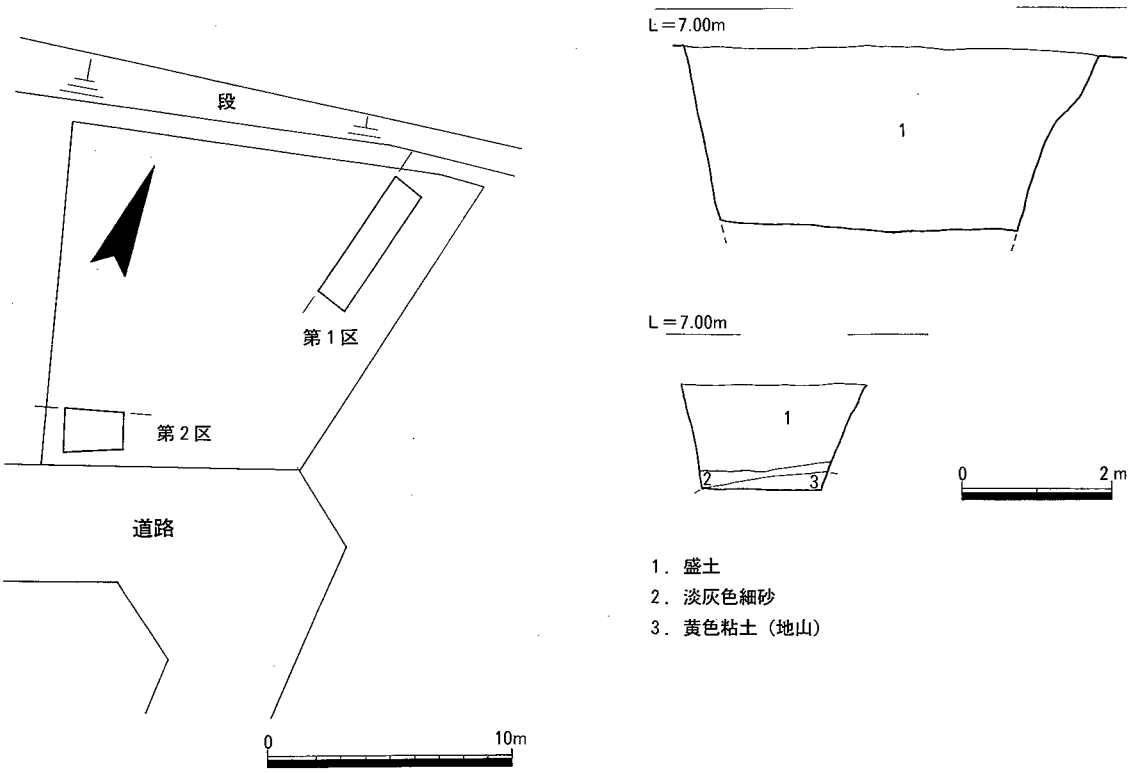


図６　貝塚寺内町遺跡（98－２）調査区配置図

Ⅲ　貝塚寺内町遺跡（98-7区）の調査

遺跡の概要については割愛するが、今回の調査地は貝塚市北町358－１である。砂堆部に位置し、現状標高は3.7mを測る。

建設計画にもとづき、建設予定地内東部に南北方向（1.7×5.3m）の調査区を設定し実施した。調査区は現状での盛土（層厚0.2m）を除去した段階で地山に到達した。地山面は近代以降と見られる撹乱により削平されており、面的には残存していない。したがって、遺構についても確認できなかった。遺物についても出土しなかった。（図２、７、図版３）

本調査地周辺は発掘調査例が非常に少なく、遺跡の状況が不明確であった。周辺に比べ標高が約１m前後高いため、北西～南西方向に流れる北境川による自然堤防であるとの認識はあったものの、数少ない周辺調査例からは良好な資料は得られず、遺跡の状況は不良でとあると推定していた。しかし、自然堤防上であるが故に、逆に遺構、遺物が存在する可能性もあると判断し、今回調査となった。

結果は先述のとおり、遺構、遺物は発見できなかった。本調査地の既設建物が銭湯であることから、その建設時に地下を大幅に掘削したためと言うことが、遺構が存在しない主な原因であろう。遺物が出土しないことからすると、当初から遺構等が存在しなかった可能性は高い。本寺内砂堆部で遺構等の状況が良好な南町においても、寺内西端を画する清水川の自然堤防上では遺構等の密度が低く、両町とも同様の傾向が見て取れる。周辺の遺跡状況が異なるため、この傾向は同一原因によるものとはできないが、現状が不明である自然堤防上の今後の検討材料としては興味深いものと考えられる。

本遺跡では調査数が60ヶ所を越えるものの、住宅改築に伴う今回のような小規模な調査が大半であり、調査結果の位置付けが単独では難しい。遺跡のほぼ全域が住宅密集地である貝塚寺内町遺跡は、上記の様な総合的な検討無くしては語れない。

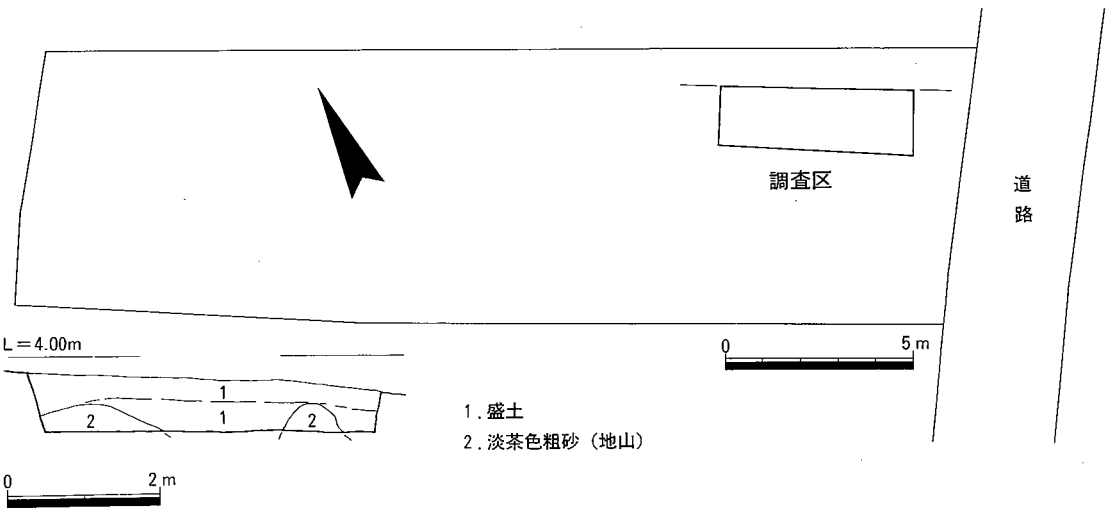


図７　貝塚寺内町遺跡（98－７）調査区配置図

Ⅳ　津田北遺跡（98-5区）の調査

津田北遺跡跡は貝塚市北部の大阪湾に面し、本市と岸和田市とのほぼ境界なす津田川右岸の砂堆部（デルタ)、標高１～２ｍを測る地点に位置する。本遺跡は（株）テザック用地における住宅・都市整備公団による一連の宅地造成に伴う発掘調査によって発見したものである。

その調査では、15世紀以降の耕作跡、津田川河口部・海岸分での近世農地造成の状況が明らかになった。また岸和田市行域の調査では岸和田城下町の南西端が確認された。遺跡範囲の東には紀州街道がとおり、絵図等では近代までは農地であったことが判明している。今回の調査地は貝塚市津田北106－２であり、先の調査地から紀州街道を挟みすぐ南東側に接した地点である。現状標高は２ｍを測る。(図２、８、図版４）

建設計画にもとづき、建設予定地内北部に、東西方向（1.5×7.5m）の調査区を設定し、調査を実施した。調査区の層序は７層に分別できる。第１層現代盛土（層厚0.25m)、第２層石炭ガラ盛土（層厚0.4m)、第３層淡灰色シルト（層厚0.15m)、第４層淡赤灰色シルト（層厚0.1m)、第５層黄灰色シルト（層厚0.18m)、第６層暗黄色シルト（層厚0.18m)、その下が地山である淡茶灰色シルト（礫混）である。出土遺物が少ないため確定できないが、第３、４層は近世、第５、６層は中世後半から末にかけての耕作土と見られる。これらは（株）テザック跡地発掘調査にて検出しているものと同一であり、紀州街道越えて東側にも広がることが判明した。遺構は確認できなかった。

遺物は盛土より肥前系磁器染付碗、土師質植木鉢片が出土した。

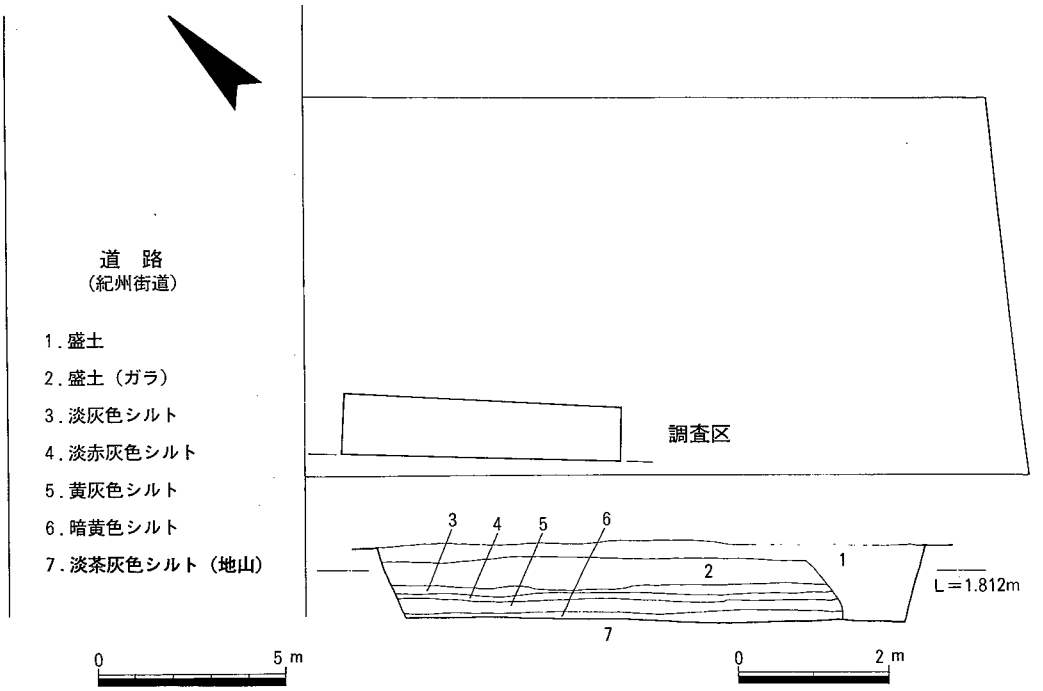


図８　津田北遺跡（98－５）調査区配置図

V　津田北遺跡（98-13区）の調査

遺跡概要については前章のとおりであり、ここでは割愛する。今回の調査地は貝塚市津田北95－2であり、98－5地点と同じく紀州街道に接した地点である。現状標高は2mを測る。（図2、9、図版5）

建設計画にもとづき、建設予定地内北部に、東西方向（1×6m）の調査区を設定し実施した。調査区の層序は5層に分別できる。第1層現代盛土（層厚0.25m）、第2層石炭ガラ盛土（層厚0.4m）、第3層耕作土（層厚0.15m）、第4層褐色シルト（層厚0.1m）、その下が地山である暗黄色礫である。遺構はなく、遺物は第3層より和泉音羽焼鉢片が出土した。

第4層の年代は遺物がないので確定できないが、98－5地点における第3、4層に対応すると考えられ、近世と言えよう。

今回の調査では先の調査地点同様、遺構は確認できなかった。しかし、（株）テザック敷地内に存在する遺物包含層が、本地点にも及び、東側にも広がりを持つことが判明した意義は大きい。また、紀州街道を越えて存在すること、街道周辺には町屋は存在しないこと等新たな事実も確定できた。

さて、先の調査地と比べると、地山標高は約0.4mこちらが高い。調査地周辺の現状地形はほぼフラットであるが、（株）テザック敷地内の調査では、北東から南西方向に低くなっていく。津田川氾濫等の作用によるものと推定できるが、今回はこれとは逆であり東側が低くなっている。

視野を広げると、調査地北約150mには複雑に屈曲した水路が存在する。形状から、この水路は旧河道の可能性が高く、この河川による開析作用によってできた斜面地に両調査は存在すると考えると、地山面の比高が容易に理解できる。水路東岸（岸和田市側）の状況が不明確なので断定はできないが、妥当な推定と考える。（株）テザック敷地内においも多数の流路を確認しており、調査地周辺の地形変化は非常に激しかったと言える。

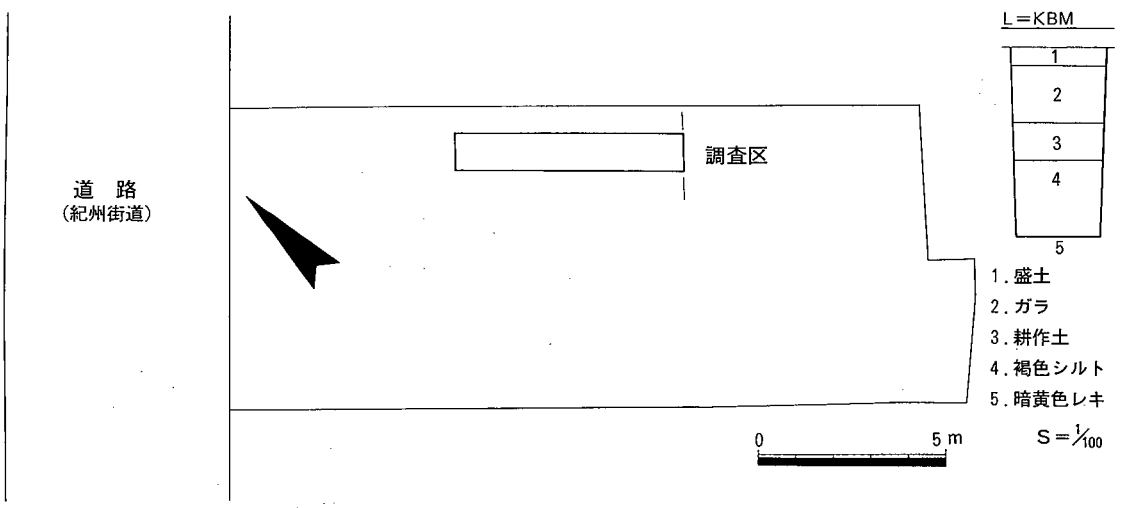


図9　津田北遺跡（98－13）調査区配置図

Ⅵ　海塚遺跡（98-3区）の調査

海塚遺跡は貝塚市北西部大字「海塚」「加神」、海岸線よりやや内陸に入った標高13～15ｍを測る地点に位置する。本遺跡は平成８年の民間開発に伴う発掘調査によって発見、登録したものである。これまでに２度の発掘調査を実施し、中世から近世にかけての耕作地開発、旧水間街道と見られる道路側溝等を確認している。遺跡範囲は東西、南北共に350ｍを測る。今回の調査地は貝塚市海塚307－１である。現状標高は約13.5ｍを測る。（図２、10、図版６）

建設計画にもとづき、建設予定地内北部に、南北方向（1.6×5.2ｍ）の調査区を設定し実施した。調査区の層序は４層に分別できる。第１層盛土（層厚0.3ｍ）、第２層耕作土（層厚0.1ｍ）、第３層灰色砂質土（層厚0.1ｍ）、その下が地山である暗灰黄色粘土である。第２層は既設建物の造成工事時に除去されたのか部分的にしか存在しない。また、第３層についても地山が高くなる東側には存在しない。遺構は地山上面にて検出した粘土採掘土坑（ＳＤ－１、２）２ヶ所である。

ＳＤ－１は第３層下から切り込むものであり、一部の検出のため全体の規模は不明だが、検出長3.7ｍ、検出幅１ｍ、深さ0.65ｍを測る。埋土は第１層灰色砂質土黄褐色粘土ブロック含、第２層灰オリーブ色粘土灰白色粘土ブロック含、第３層灰色微砂である。第３層は数㎜の堆積であり図上では表現できない。ＳＤ－２は第２層下からの切り込むものであり、検出長１ｍ、検出幅0.7、深さ0.75ｍを測る。埋土は第１層灰色砂質土、第２層灰色粘土である。これらは粘土採掘土坑と見られる。

遺物は、ＳＤ－１は波佐見碗片、土師質土器片、ＳＤ－２は瓦器椀片、第２層は波佐見碗片が出土した。

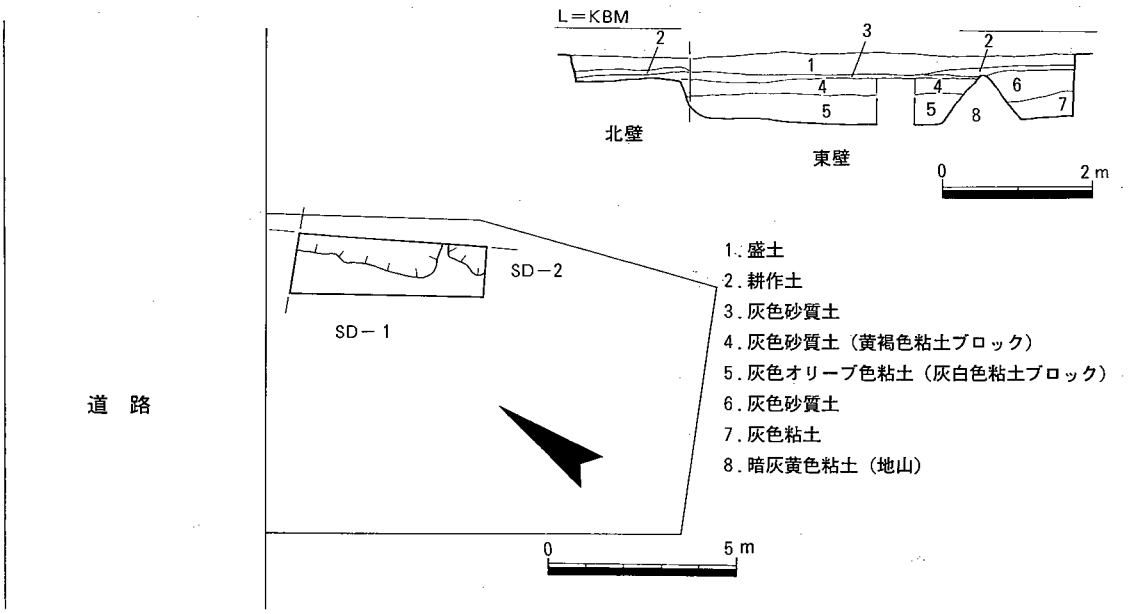


図10　海塚遺跡（98－３）調査区配置図

Ⅶ　加治・神前・畠中遺跡（98-12区）の調査

加治・神前・畠中遺跡は本市中央部をほぼ縦断して流れる近木川右岸の段丘上、標高11～20mを測る地点に位置する。大字「加神」「畠中」「石才」に所在し、遺跡内には市役所庁舎を始め公共施設が集中しており、これら建設に伴う発掘調査を多く実施しており、市内では最も纏まった調査成果が得られいる。遺跡範囲は東西1.3ｋｍ、南北1.5ｋｍを測る。今回の調査地は貝塚市石才149－５である。現状標高は20.5mを測る。（図３、11、図版７）

建設計画にもとづき、建設予定地内南部に、東西方向（１×４ｍ）の調査区を設定し実施した。調査区の層序は３層に分別できる。第１層盛土（層厚0.7m）、第２層耕作土（層厚0.2m）、その下が地山である黄灰色粘土である。地山上面は波打った状況であり、遺物包含層も存在しないため、削平を受けたものと考えられる。その時期については確定できないが、面的に削平されている状況から近代以降と推定できる。

調査地の北西側に接する都市計画道路文化会館山手線では、平成４年にその全面を発掘調査した。本調査地と一筆を成す部分についても先の調査地に含み、遺物包含層・数面に渡る中世鋤溝群を検出し、今回の状況とは全く異なる。調査地周辺地形を見ると、北東から南西方向、北北東から南南西方向と２種の標高高低差が見られる。後者は近木川による開析作用によるものであるが、調査地はこの影響を受けている地点でなく、前者である。したがって、都市計画道路調査地点より東側に位置する本調査区は、本来標高が高く、削平されたと言える。

削平の原因であるが、盛土、耕作土の堆積のみであることから、先に近代以降と推定した。近代の削平となると、まず窯業原料の粘土採掘が考えられる。周辺地下には煉瓦原料の粘土採掘痕が多数存在する。これらは土坑状に深く採掘するものであり、それが重複して広がりを持ち今回の様な平面的なものではない。しかし、他の地域、小瀬等では、農地一筆を平坦に掘削する方法が用いられているので、本調査地の削平についても、粘土採掘であると言える。

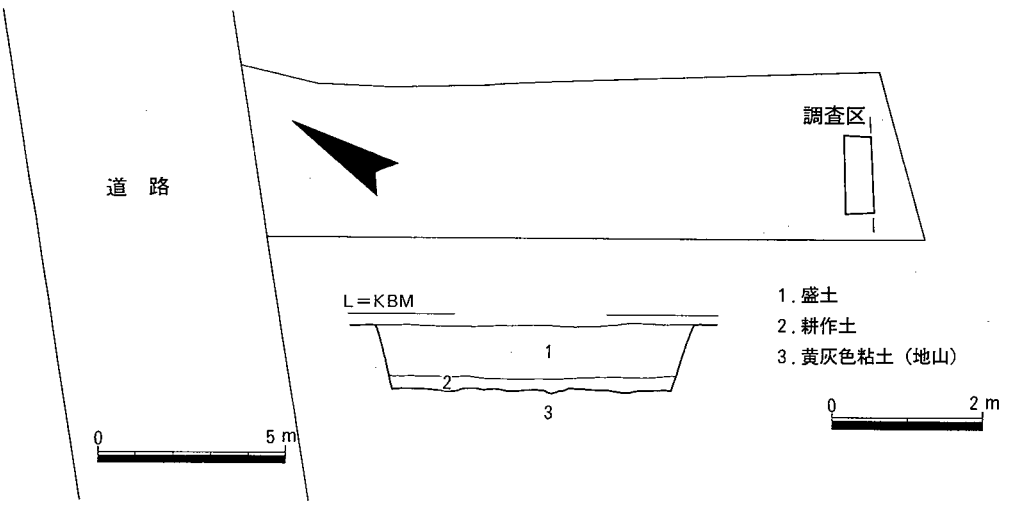


図11　加治・神前・畠中遺跡（98－12）調査区配置図

Ⅷ　沢城跡（98-17区）の調査

沢城跡は貝塚市北部の大阪湾に面し、砂堆部から中位段丘端部にかけての海抜２～９ｍを測る地点に位置する。北側は北境川、南側は清水川、東側は南海本線までの部分がその範囲である。北東～南西約800m、南東～北西約550mを測る。今回の調査は沢1149－１である。現状標高は約10mを測る。

建設計画にもとづき、建設予定地内北部に、東西方向（1.2×10m）の調査区を設定し実施した。調査区の層序は２層に分別できる。第１層盛土（層厚0.48～0.78m）、その下が地山である灰白色砂礫である。遺物包含層は存在せず、遺構も確認できなかった。（図３、12、図版８）

遺物は盛土内より瓦質羽釜、肥前系磁器染付片、ホウラク片、瓦質火鉢等が出土した。

本調査では、沢城に関する新たな発見はなかった。これまで、沢城の遺構と推定しているものの検出は２ヶ所であり、城跡としての解明は進んでいない。この状況は簡易な砦であるという傍証である可能性が高い。

集落跡としての解明は比較的進んでいる。周辺における調査では、中世後半から近世にかけて、何らかの遺構は必ず発見できる。分布としては段丘上の旧集落内である。調査では、複数の遺物包含層を確認するものの、その層厚は薄く、地山は現地表面に近い。高位地にあるため、盛土をせず利用していたと考えられる。しかし、遺構、包含層はそれほど削平を受けず、良好な状況にある。今回の調査でも遺物が出土しているため、本来は本調査地においても、遺構等が存在したと言える。土層の状況から、現代に大幅な削平、攪乱を受け、現状の様になったものと考えられる。したがって、調査にて盛土としたものは、攪乱土とできる。

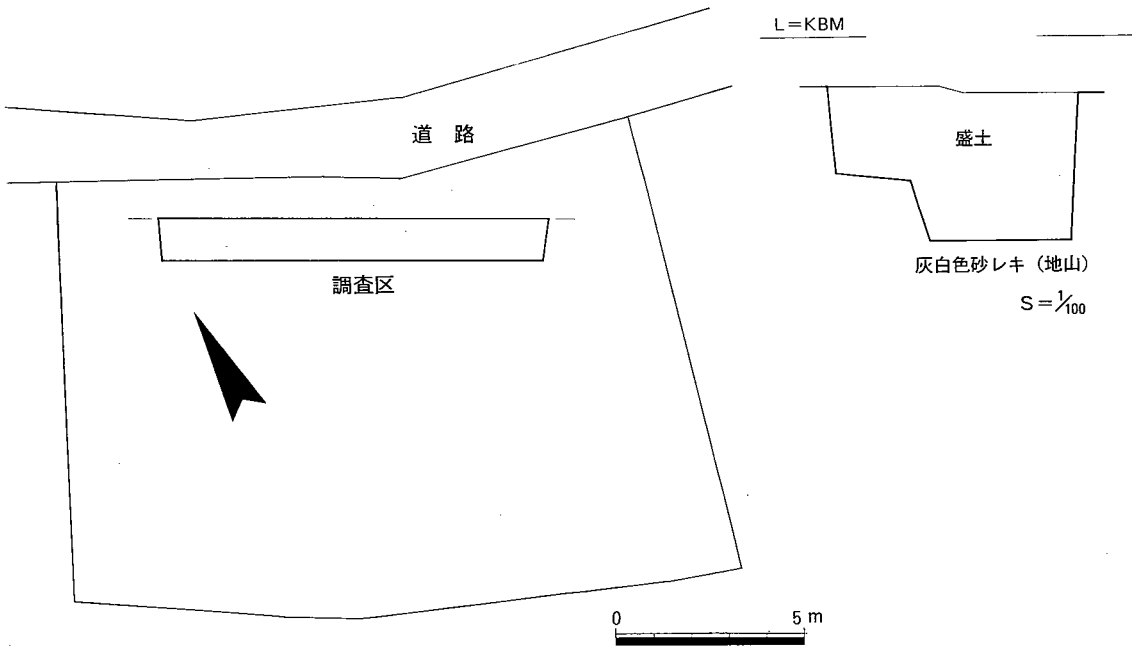


図12　沢城跡（98－17）調査区配置図

Ⅸ　森下代遺跡（98-22区）の調査

森下代遺跡は貝塚市のほぼ中央部、大字「森」に所在し、近木川右岸の段丘上に位置する。現状標高53mを測る。遺跡範囲は東西270m、南北400mを測る。遺跡内の多くが市街化調整区域であるため農地が多く残り、調査例は少ない。今回の調査地は森432－３である。

建設計画にもとづき、建設予定地内南西部に、東西方向（１×５ｍ）の調査区を設定し実施した。調査区の層序は４層に分別できる。第１層耕作土（層厚0.6m)、第２層淡灰黄色土（層厚0.3ｍ)、第３層淡灰褐色粘質土（層厚0.1m)、その下が地山である明黄色シルトである。出土遺物が少ないため確定できないが、第２、３層は中世の遺物包含層と見られ、地山面にて鋤溝を検出したので耕作土と考えられる。遺構は地山面にて検出し、溝２、鋤溝１を検出した。ＳＤ－１は調査区西端にて東側肩部のみ検出したものであるが、検出長１ｍ、検出幅0.8m、深さ0.5mを測る。埋土は上から暗黄灰色シルト（１層)、暗紫褐色シルト（２層)、暗紫褐色粘土（３層)、暗紫褐色シルト（４層）であり、流れ２回以上、滞水１回が考えられる。ＳＤ－２は調査区の西よりにて検出した北北西～南南東方向に流れる溝である。検出長１ｍ、幅1.4m、深さ0.8mを測る。埋土は上から暗黄灰色シルト（１層)、暗紫褐色シルト黄色シルト混（２層)、暗紫褐色シルト（３層)、暗紫褐色粘土（４層)、暗紫褐色粗砂（５層)、淡黄灰色粗砂（６層）であり、流れ４回以上、滞水１回が読みとれる。しかし、３層については溝東肩からの流入であり、単純な流れとはできない。ＳＤ－３は調査区ほぼ中央で検出した鋤溝である。方向はＳＤ－２と直交する。長0.9ｍ、幅0.2m、深さ0.05mを測る。埋土は淡灰褐色粘質土である。遺物はＳＤ－１、２層から土師器皿、土師器片２、第３層からは瓦器椀片、須恵器片、土師器片が出土した。遺構は中世のものと判断できる。(図３、13、図版９）

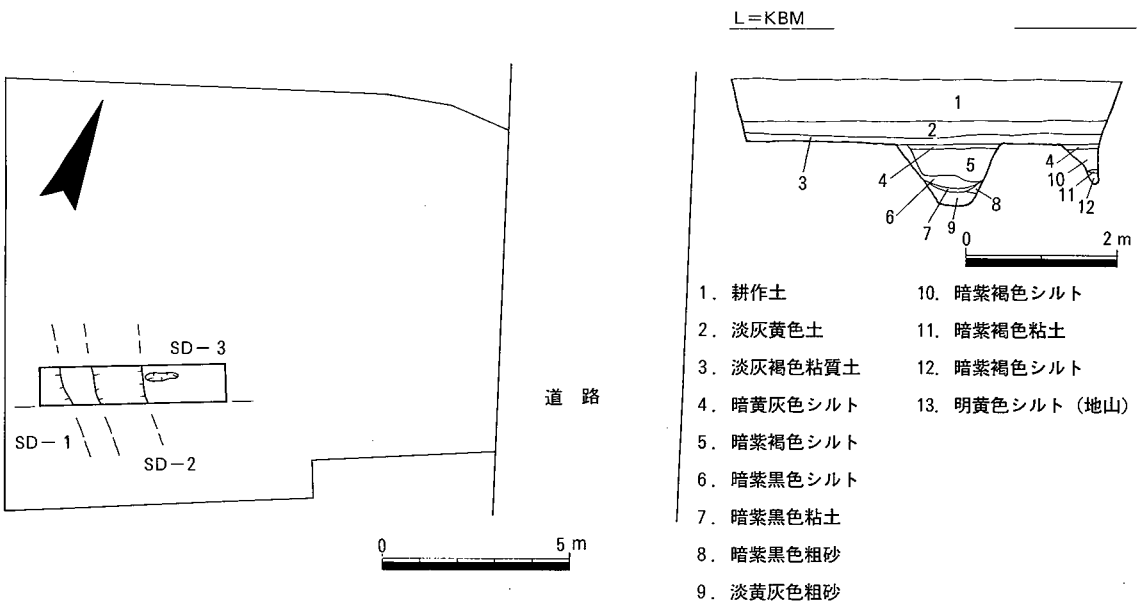


図13　森下代遺跡（98－22）調査区配置図

X　清児遺跡（98-24区）の調査

清児遺跡は本市内陸部、大字「清児」、「麻生中」に所在し、近木川右岸の段丘上に位置する。現状標高は33～39mを測る。遺跡範囲は東西900m、南北800mを測る。遺跡範囲の80％以上が市街化調整地域であるため、一面農地、池地が広がり、宅地は遺跡西端部のみである。したがって、発掘調査についてもこの西端部が中心であり、遺跡内容の解明にはまだまだ時間がかかると思われる。今回の調査地は麻生中231－２である。（図３、14、図版10）

開発計画にもとづき、建設予定地南部に南北方向（1.7×5.6m）の調査区を設定し実施した。調査区の層序は４層に分別できる。第１層盛土（層厚0.5m）、第２層耕作土（層厚0.1m）、第３層灰オリーブ色土（層厚0.1m）、第４層灰オリーブ色粘質土（層厚0.1m）、第５層灰オリーブ粘土（層厚0.2m）、第６層灰色粘砂（層厚0.1m）、その下が地山である灰オリーブ色砂礫である。遺構としては第６層掘削後に、調査区南端近くに肩部を持つ落ち込みを確認した。
検出長1.5m、幅５m、深さ0.25mを測る。埋土は上から、灰色砂礫（１層、層厚0.15m）、黄灰色砂礫（２層、層厚0.1m）、黄灰色粘砂礫土（３層、層厚0.1m）であり、南から北に向かって、３層から順に流れ込む様に堆積する。

遺物は第６層から土師質土器が出土した。

本落ち込みであるが、堆積状況からするとすべて南から流入した状況が観察され、下層のみを落ち込みとせずに、盛土、耕作土以外すべて搬入土と考えたほうが自然であると思われる。しかし、遺構内１～３層、拳大の石が多数含まれており、それ以外の層とは画する必要は認められる。この性格については確定できないが、流路が存在した可能性が高い。遺構内からの遺物は無く、中世の可能性は高いが時期不明である。

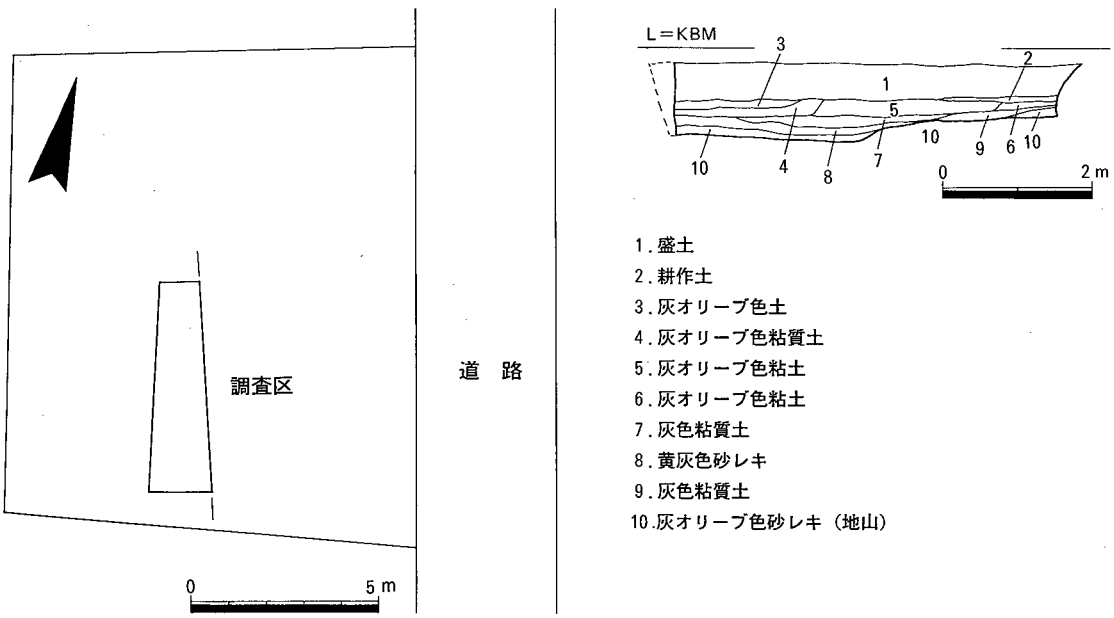


図14　清児遺跡（98－24）調査区配置図

XI　東遺跡（98-25区）の調査

東遺跡は貝塚市北部の中位段丘上に位置し、標高12～13mを測る。北側は貝塚寺内の北辺を限る北境川に接し、段丘から北境川の開析谷斜面にかけて位置する。その範囲は北東～南西約800m、南東～北西約550mを測る。調査地は東６－５である。（図２、15、図版11）

建築計画にもとづき、建設予定地内南部に、東西方向（１×5.2m）の調査区を設定し実施した。調査区の層序は５層に分別できる。第１層盛土（層厚0.25m）、第２層暗灰色粘質土（層厚0.08m）、第３層暗灰色粘質土上面酸化（層厚0.08m）、第４層暗灰褐色土（層厚0.08～0.24m）、その下が地山である黄白色粘土である。遺構は地山面において粘土採掘土坑を２基確認したが、断面観察では第４層は地山上平坦部分から土坑まで連続して堆積しており、地山上面は広範囲に粘土採掘が行なわれていることが判明した。出土遺物が少ないため確定できないが、第３層からは瀬戸染付磁器碗、第４層からは土師器片、波佐見碗が出土し、幕末から明治にかけて粘土掘削が行われ、埋戻後農地に復旧されたと見られる。

採掘土坑の規模はＳＫ－１が幅1.3m、検出長0.8m、深さ0.15mを測る。ＳＫ－２は調査区外に広がるため幅は不だが、検出長0.8m、深さ0.15mを測る。これらの規模は掘込が明確ではないので、本来のものではなく、最終状況を検出したものであることをお断りする。両遺構とも調査区に直交し、北東～南西方向に伸びる。

調査地の東側では、平成６年の市営住宅建設に伴う発掘調査において、今回同様、多数の粘土採掘土坑を検出した。前回の調査ではその分布地域は明確ではなく、西に広がるとの推定をしていたが、今回の調査によって西側に広がることが明らかとなった。

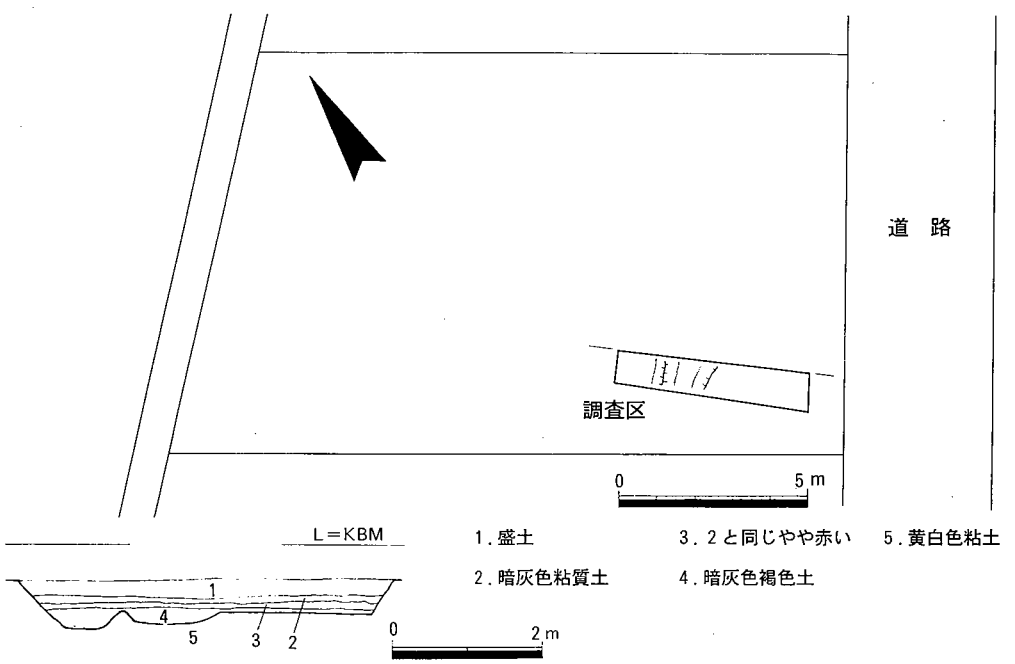


図15　東遺跡（98－25）調査区配置図

Ⅻ　半田遺跡（98-26区）の調査

1、位置と環境（図16）

今回発掘調査を実施したのは、貝塚市北部、大字半田、麻生中に存在する半田遺跡の一角である。ＪＲ阪和線東貝塚駅南約500m前後に位置し、周辺は一定宅地化されているものの、農地がまだ多く残っている。遺跡範囲は東西400m、南北350mを測るが、その1／2は池地である。

本遺跡は、本市と岸和田市とのほぼ境界を流れる津田川、その支流である小渕川左岸の段丘上に位置する。周辺の標高は約26mを測る。文化財保護法による登録の内容は、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡等となっているが、これまでの調査では中世以降の遺構、遺物包含層を確認しているのみである。本遺跡を縦断し熊野古道が通り、遺跡南西には古道に沿う一里塚が存在しており、古代末以降が本遺跡の時代の中心である。

西には秦廃寺、麻生中下代遺跡が存在する。平成８年度、府営半田住宅改築工事に伴う発掘調査が大阪府教育委員会によって実施さた。６世紀後半から８世紀前半にかけての竪穴住居跡、掘立柱建物、溝等の遺構が多数検出され、同時代の土器等が多量に出土した。調査担当者は「秦寺」建立にかかる工人集団の居住地と位置付けている。

秦廃寺については、白鳳期以降の古瓦が出土する以外その詳細は不明である。しかし、先の発掘調査によって寺域南限と見られる部分が検出され、ほぼ一町四方の寺域が想定されている。

南西には中世耕作跡を検出した麻生中遺跡、弥生時代後期～古墳時代の土器が出土し、中世以

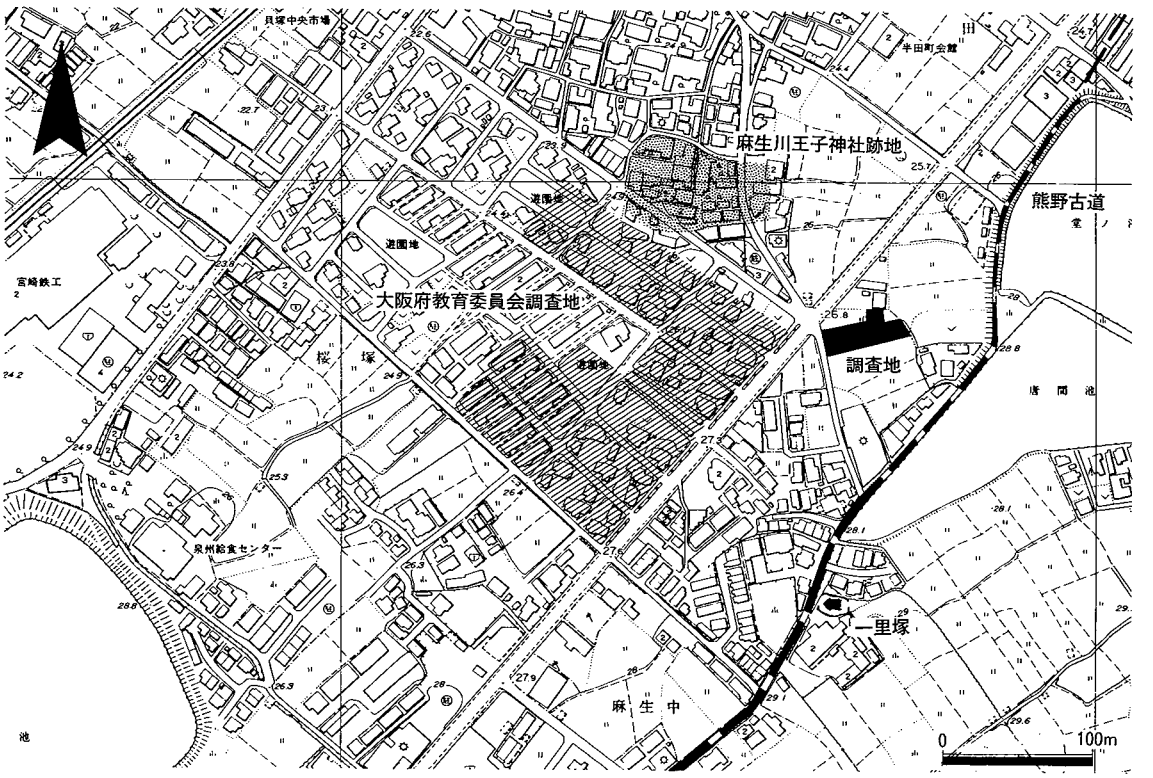


図16　半田遺跡（98－26）調査地位置図

降の耕作跡を検出した新井ノ池遺跡が存在している。南は遺跡の存在は希薄であるが、南東には古墳時代を中心とする海岸寺山遺跡群が存在している。遺跡北側は津田川等の氾濫原、開析谷斜面にあたり、遺跡の確認は十分ではない。

この様に本遺跡周辺は、弥生時代後期以降開発が開始され、古墳時代後期から奈良時代にかけて周辺における中心的な地であったことが理解できる。

2、調査の概要（図17）

調査は開発計画にもとづき6ケ所の調査区を設定して実施した。工事により破壊される浄化槽部分調査区（第3区、5×7m）、遺構状況確認のための擁壁部分調査区（第1、2、4～6区、1.5×3mを基本）である。調査面積は約80㎡である。

開発地は畑地2筆であり、比高約0.2mを測り南側が高い。第1、4、6区が南側、第2、3、5区が北側に設定した。各調査区の状況であるが、第1、4、5区については、後世の削平によって遺物包含層は存在せず、遺構も捉えることができなかった。ただし、第1区については、調査区東側、南側の断面には、遺物包含層が1層（にぶい黄色土、第2層、層厚約0.08m）存在し、また、北東～南東方向に流れる溝を確認した。第2、3区では遺構は存在するものの遺物包含層はなく、後世の削平を受けている。第6区は良好な遺物包含層が2層あり、遺構も存在する。

第6区の層序は盛土、耕作土の下に上から、灰黄褐色土（第3層、層厚0.08m）、暗灰黄色土（第4層、層厚0.2m）が順に堆積し、その下が地山である。遺物包含層の年代は出土遺物からは7～8世紀代のものと見られる。

地山層は調査区で異なる。第1区にぶい黄褐色土礫混、第2区明黄褐色土、第3区灰黄色砂質土、第4区明黄褐色粘土、第5区灰白色礫、第6区淡褐色土礫混である。各区で異なることは削平によるものであり、第3区灰黄色砂質土の下層には第2区同様の明黄褐色土が存在し、各調査区での違いは地山層の上下関係を反映していると見られる。地山上面の標高は第1区26.217m、第2区26.08m、第3区26.067m、第4区26.221m、第5区26.067m、第6区25.871mを測り、現地表面の高さをほぼ反映している。ただし、遺物包含層が良好な第6区が最も低くなっており、このため削平を免れたものと見られる。

調査地本来の状況は、2～3層の遺物包含層が存在し、東西方向のほぼ中央、第3区あたりを頂点として東、西、北方向に傾斜する地形が想定できる。

3、検出遺構（図17、18、図版12～14）

遺構を面的に確認できたのは、第2、3、6区である。内訳は溝2、落ち込み2、柱穴26を数える。この他近世以降のものを検出したが今回は割愛し、先の遺構について記す。

ＳＤ－２０１

本遺構は第2区にて検出した東西方向に流れる溝である。北側肩部は調査区外であるため検出できなかったが、南側肩部から底部にかけて検出した。検出幅1～1.5m、検出長4m、深さ0.54

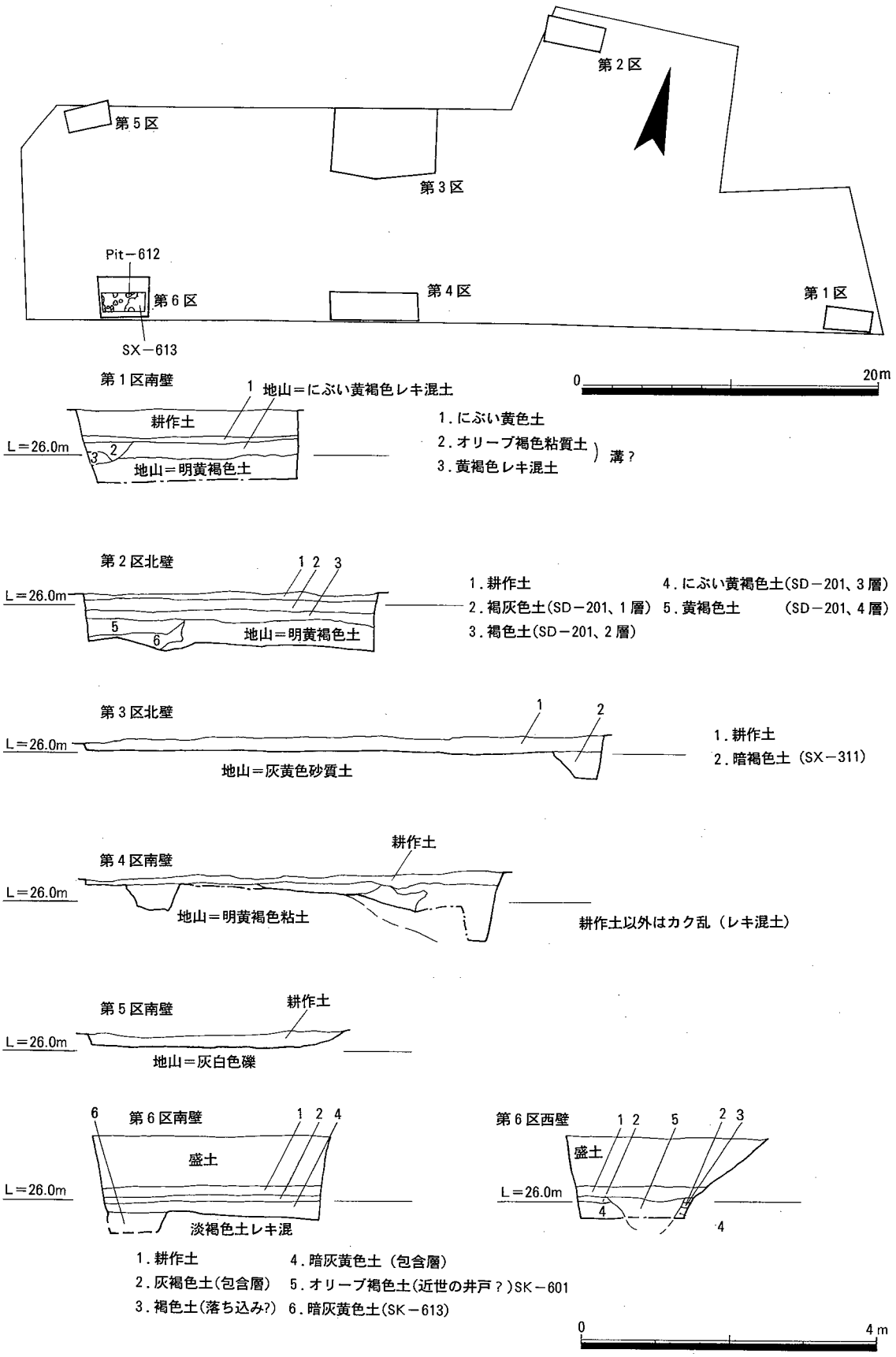
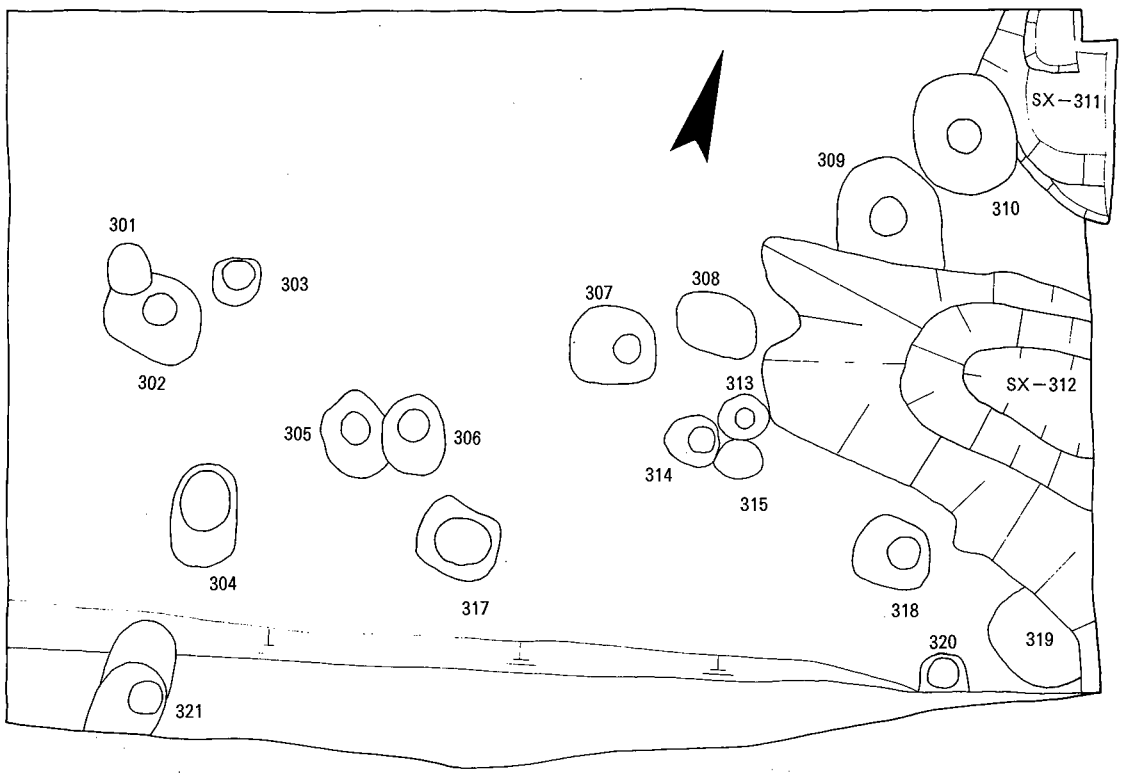
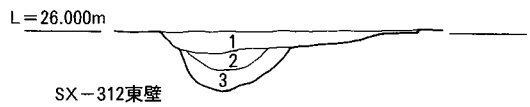


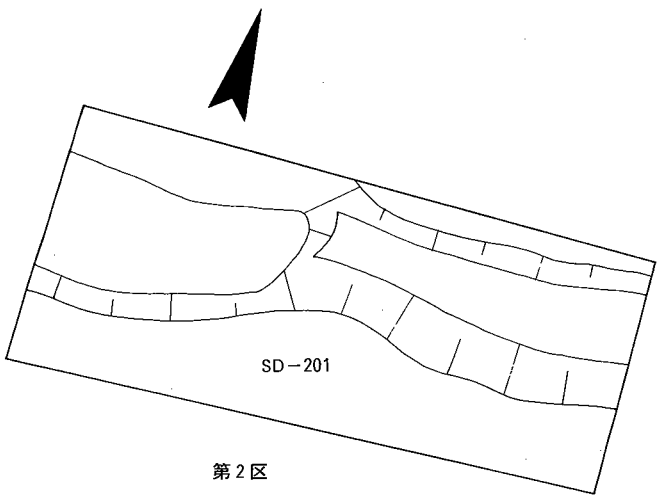
図17　半田遺跡　調査区配置図、土層図



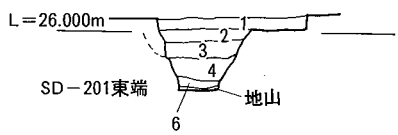
第３区

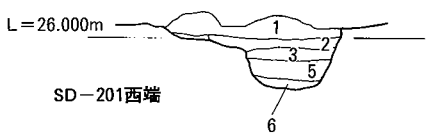


1．褐灰色土
2．褐灰色土
3．にぶい黄褐色土
SX－312



第２区





1．耕作土
2．褐灰色土（SD－201、１層）
3．褐色土（SD－201、２層）
4．にぶい黄褐色土（SD－201、３層）
5．にぶい黄褐色土（SD－201、３層）（灰含む）
6．黄褐色土（SD－201、４層）

0　2m

0　2m

図18　半田遺跡 第２、３区　遺構配置図、土層図

～0.63mを測る。東半部は断面形状を逆台形を呈し、北側部分法面は平坦面を持つ2段掘りである。西半部分は幅が広がり、断面形状も楕円形となる。この部分は水だめ的な性格が考えられる。底部比高は約0.05m（25.48－25.43mＴＰ）を測り東側が高い。最深部は西半部の中央であり25.32mを測る。流れについては検出した部分では確定できないが、形状から見ると東→西方向が想定できる。

埋土は5層に分別できる。第1層褐灰色土、第2層褐色土、第3層にぶい黄褐色土、第4層黄褐色土である。西半部分は第3層に炭が含まれており基本的には第3層であるが、別層として分別した。それぞれの層はほぼ水平に堆積している。遺物は第2層直上、第4層直上に集中しており、第4層はほとんど遺物を含まない。堆積状況、遺物出土状況からすると、溝掘削後、一定期間掘削当時の深さを保っていたが、多少の埋没後、ゴミの廃棄が開始され、帯水状態で破棄、埋没が繰り返されたと理解できる。なお、北側法面の平坦面であるが、今回は肩部を検出していないこともありその性格は確定できないが、第3層上面と連続しており、溝の再掘削（浚渫）の可能性が高い。

遺物は須恵器蓋杯、広口甕、土師器皿等が多数出土した。埋没時期は7世紀後半である。

ＳＸ－３１２

本遺構は第3区東端にて検出した東西方向の溝である。西端部を検出した。検出幅1.85～2.5m、検出長2.8m、深さ0.7mを測る。断面形状はすり鉢状であるが、ゆるい段を2つ持つ。法面の傾斜は北側がきつく、南側、西側はゆるい。

埋土は3層に分別でき、第1層淡褐灰色土（層厚0.25m）、第2層褐灰色土層（層厚0.2m）、第3層にぶい黄褐色土（層厚0.25m）である。遺物は小破片が全体に散らばる状況で出土した。量的には第1層が最も多く、底に近づくほど少なくなる。ただし、遺物の大型破片が集中する場所がある。第1層では検出した東端、断面図を作成した地点の北側法面付近、第3層では第1層と同地点の上層付近において、須恵器杯、土師器皿が出土し、第3層底南端付近において土師器壷が出土した。埋没の状況としては、遺物出土からは人為的に埋め戻したことが考えられるが、堆積状況からは自然埋没状態であり、現状では両方の原因が係わったとしか言えない。

遺物は先のとおり須恵器、土師器が多数出土し、砥石、鉄製品が出土した。埋没時期は8世紀前半である。

ＳＸ－３１１

本遺構は第3区北東端にて検出した落ち込みである。一部分の検出であるため、全体の規模、性格は不明である。検出幅0.9m、検出長1.4m、深さ0.24mを測る。北側が深く南側が浅い。埋土は暗褐色土一層である。

遺物は須恵器杯、土師器片が出土した。埋没時期は6世紀後半である。

Ｐｉｔ－３０１～３１０、３１３～３１５、３１７～３２１

これらは第3区にて検出した柱穴である。堀方平面規模は直径0.3m（301、303、313、314、315、320）、0.5～0.6m（305、306、307、308、317、318）、0.7m（302、304、309、310、321）を測る

ものの３種に分別できる。深さは0.15m以下（306、308、313、315、317、320）、0.2～0.4m（301、302、303、307、309、314、318、321）、0.5m以上（304、310）を測るものの３種に分別できる。埋土は３種あり、褐色土（301、308、309、310、314、315、318、319、320）、オリーブ褐色砂質土（302、304、305、306、307、317）、明黄褐色土（303、313）がある。柱径は304、317が0.3mを測る以外、判明するものでは0.15mを測る。柱穴からは３時期以上の建物の存在が想定できる。平面配置では302、304、306、307で一棟、317、308、310で一棟の復元が可能であるが、形状、深さ、埋土からはこのセット関係は成立せず、建物規模は確定できない。遺物は須恵器杯、甕、土師器片が出土したが、小破片が多く年代の確定は難しい。概ね7世紀後半～８世紀前半と見られる。

第６区検出遺構

本調査区では地山面において柱穴９、落ち込み１を検出した。西端のＳＫ－601は第３層上面からの掘り込みであり近世以降のもの（井戸？）と見られる。遺構保護のため全体については掘削せず、Ｐit－612、ＳＸ－613を部分掘削した。

612は柱穴であり、直径0.4m、深さ0.28mを測る。埋土は暗灰黄色土である。遺物は土師器片が出土した。613は落ち込みである。検出長、検出幅共に1.4m、深さ0.3mを測る。埋土は暗灰黄色土である。遺物は須恵器片、土師器片が出土した。遺物量が少なく、年代の確定は難しが、概ね７世紀後半～８世紀前半のものと見られる。

４、出土遺物

少ない調査面積に対して、比較的多量な遺物が出土した。しかし、部分発掘であることには変わりなく、接合できうる資料は少ない。以下、その主なものについて記す。

ＳＤ－２０１

１は須恵器杯である。口径15.4㎝、高さ４㎝を測る。ナデを全体に施すものの、作りは粗く、胎土には１～３㎜代の砂粒を多く含む。２は土師器杯である。マンガンが強力に付着しているため、調整等は不明だが、高台径11.8㎝を測る。３は須恵器片口である。口径16.6㎝、高さ12.8㎝を測る。成形後、底部内外面には粗いナデを施す。弱い片口一口を持つ。16は須恵器広口甕である。復元口径62.4㎝を測る。外面体部には縦位タタキを施し、部分的にナデによって消している。

４は須恵器杯蓋である。復元口径12㎝を測る。天井部は下がり、弱いかえりを持つ。５は須恵器杯身である。高台径10.8㎝を測る。ナデを全体に施すものの、作りは粗く、胎土には１～３㎜代の砂粒を多く含む。６は須恵器壺口縁部片である。復元口径14.2㎝を測る。７は弥生土器底部片である。底部径5.9㎝を測る。摩滅により調整は明確ではないが、内面に指頭圧痕が残る。後期の壺底部か。

８は須恵器杯蓋である。口径11.5㎝、高さ4.3㎝を測る。全体に焼けひずみで変形する。９は須恵器杯身である。最大径14.6㎝を測る。胎土には２㎜代の砂粒を含み、焼成甘く、瓦質を呈する。10は須恵器甕である。復元口径27.4㎝を測る。外面には３条の波状文を施す。体部内面には同心

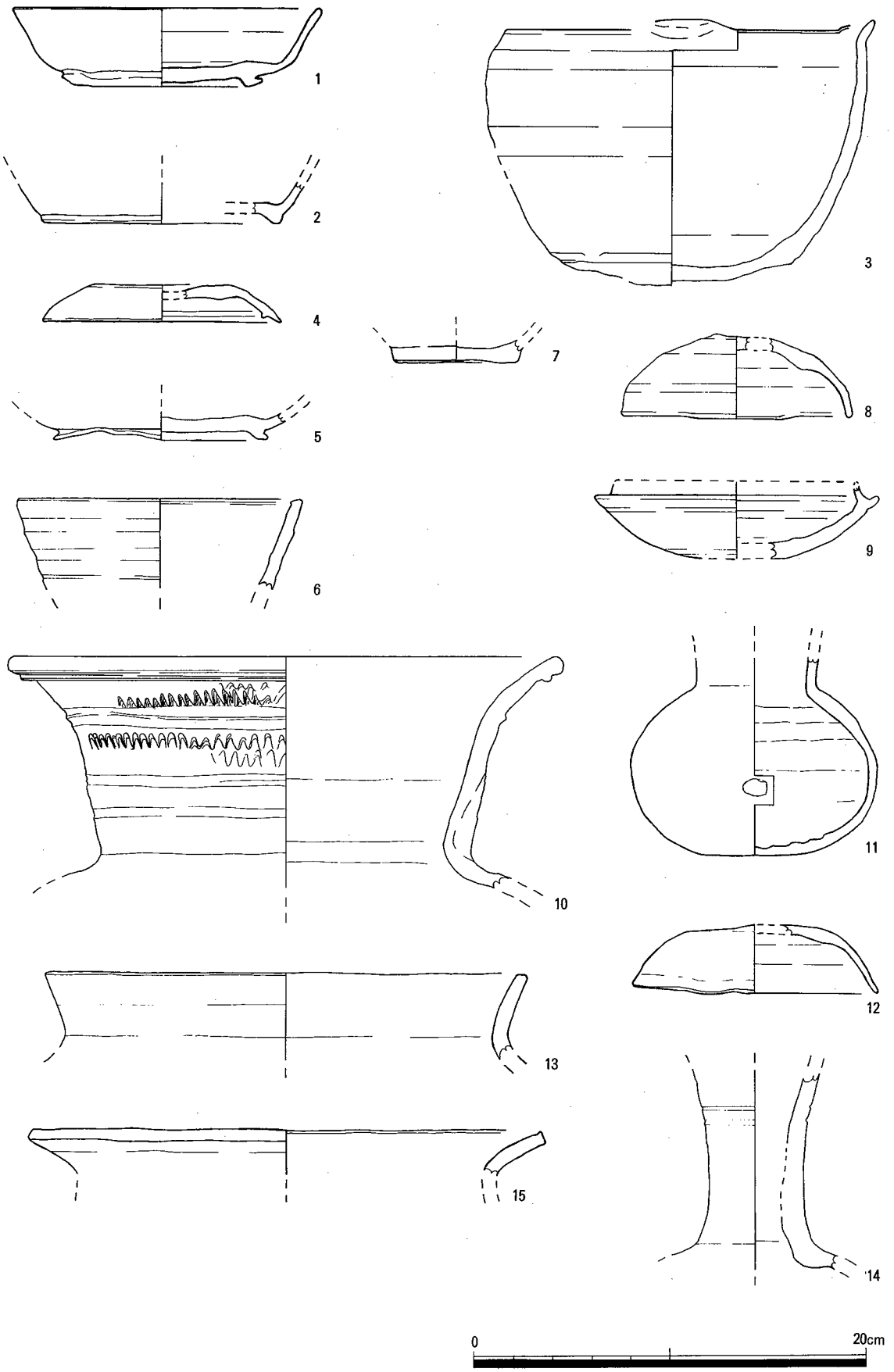


図19　SD－201　出土土器

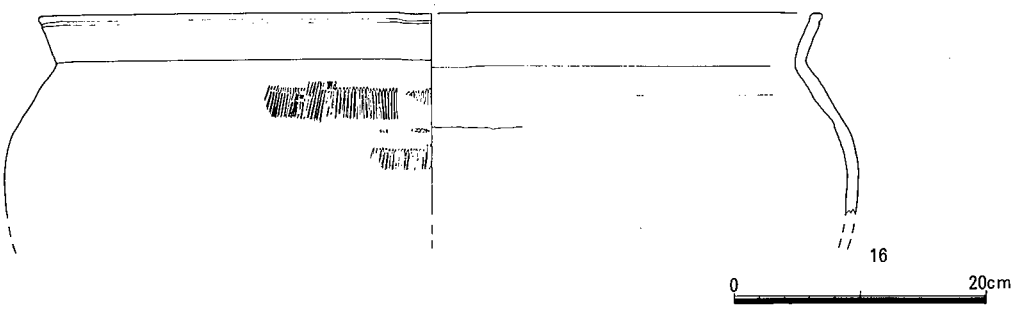


図20　SD－201　出土土器

円当具痕を有する。11は土師器壺である。口縁部以外は完存する。最大体部径12.4cmを測る。外面は摩滅により調整は不明だが、内面は頸部から上はヨコナデ、体部上半は弱い横位ナデ、下半は粗い横位ナデを施す。内面上半には６ヶ所の接合痕が残る。下半はナデのため接合痕は消されている。体部は球体であるが、底部はフラットになっている。体部最大径を測る部分よりやや下側に、外面からの穿孔１孔があり、焼成後のものである。

12は須恵器杯蓋である。復元口径12.4cm、高さ3.4cmを測る。胎土には１～２mmの砂粒を含み、焼けひずみにて変形する。13は須恵器甕である。復元口径24.3cmを測る。焼成は甘く瓦質を呈する。14は須恵器壺頸部片である。内外面に緑色の自然釉がかかり、上部が外面には沈線が２条巡る。15は土師器甕である。復元口径25.8cmを測る。保存不良のため調整不明。

１～３、16は第１層、４～７は第２層、８～１１は第３層、12～15は第４層出土である。

ＳＸ－３１２

17は須恵器杯である。復元口径13.6cm、高さ3.5cmを測る。非常に薄く丁寧な作りであり、焼成も良好である。18は須恵器杯である。口径11.2cm、高さ4.6cmを測る。焼成は甘く、灰白色を呈する。19は土師器壺である復元口径16.8cmを測る。体部外面には縦位ハケを施す。

20は須恵器杯蓋である。復元口径15.3cmを測り、これも丁寧な作りである。21は土師器壺である復元口径14cmを測る。体部外面には縦位ハケを施し、口縁部は弱く摘み上げる。22は土師器皿である。復元口径27.3cm、高さ3.2cmを測る。体部はヨコナデ施し、張付け高台を持つ。23は土師器皿底部片である。底径は不明。内外面ヨコナデ、内面には右上がり斜位暗文を施す。

24は須恵器杯である。口径14cm、高さ3.6cmを測る。低部外面には「×」の記号を施す。25は須恵器杯である。復元口径14cm、高さ3.6cmを測る。外面には４条の沈線による記号を施す。
26は須恵器杯である。復元高台径10.2cmを測る。成形は甘いが、焼成は良好である。

27は砥石である。長さ12.1cm、最大幅6.2cm、厚さ2.6cmを測る。長辺の３方は研ぎにより平滑であるが、裏面は制作時のままであり、研ぎはない。両端についても、研ぎはない。石材不明。
28は土師器皿である。口縁の一部が欠失する以外完存する。口径15.1cm、高さ2.4cmを測る。見込みは丁寧なナデ、体部はヨコナデ、底部外面はケズリ後ナデを施す。見込みには渦条、体部内面には右上がり斜位暗文を施す。29は土師器皿である。復元口径18.7cm、高さ４cmを測る。見込みはナデ、体部はヨコナデ、底部外面はケズリを施す。口縁部は上方につまみ上げる。見込みには

4条の沈線による記号を施す。

17～19は第1層、20～29は第2層出土である。

SX－311

30は須恵器杯身である。底部が膨らむので高杯の可能性もある。復元口径15.1cmを測る。外面底にはケズリを施す。

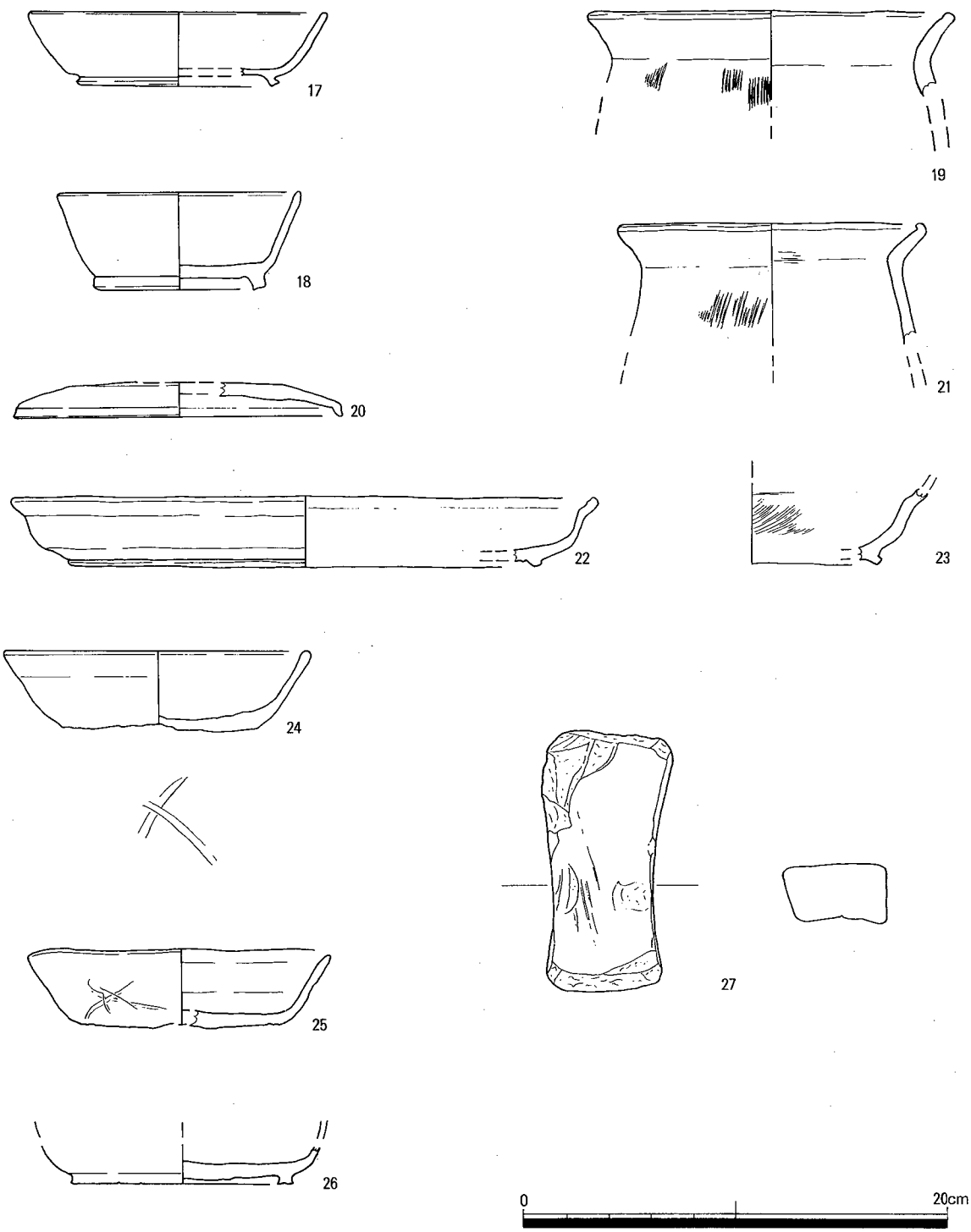


図21　SX－312出土遺物

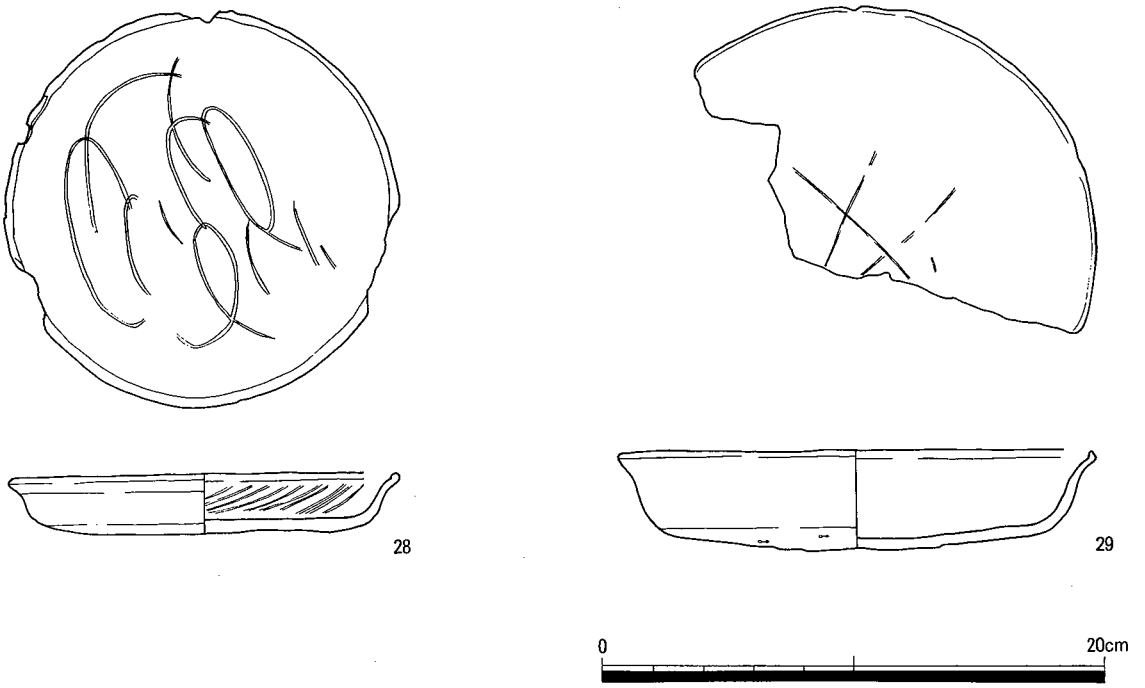


図22　SX－312　出土土器

Pit－３０２

31は須恵器杯蓋である。復元口径16.1cmを測る。焼成は良好であり、青灰色を呈す。32は土師器皿である。復元口径18.4cmを測る。保存不良のため、調整については明確ではない。

31は堀方、32は柱当出土。

Pit－３２１

33は土師器皿である。復元口径17.3cm、高さ1.5cmを測る。見込みはナデ、体部はヨコナデ、底部が外面はケズリ後ナデを施す。

ＳＸ－６１３

34は土師器皿である。復元口径23.4cmを測る。ナデによって仕上げられている。口縁部内面には弱い沈線が一条巡る。

4、まとめ

今回の発掘調査は限られた条件下でのものであったが、半田遺跡にとっては従前に無かった６～８世紀の成果を得られた意義は大きい。以下、要点をまとめる。

当地に残る最も古い時代は６世紀後半のものである。311がそれにあたるが、検出した部分が狭く、遺物量も少ないので確定的ではない。しかし、201からも同時代前後の遺物が出土しており、何がしかの営みはあったものと想定できる。しかし、積極的な利用ではなかったと言える。７世紀後半には201が掘られ、生活が始まったものと見られる。当時の建物については復元できないが、遺物は多量に出土しており充分想定できる。今回の調査では８世紀前半の利用が最も活発であったことが窺える。本時期についても建物の復元はできないが、遺物の分布状況では利用

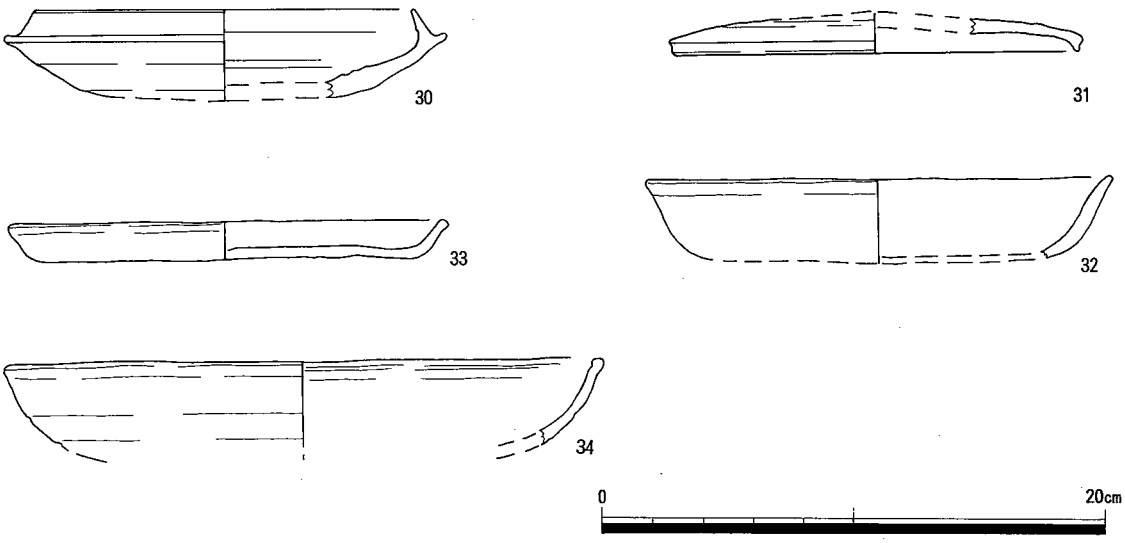


図23　SX－311（30）、Pit－302（31、32）、Pit－321（33）、SX－613（34）出土土器

の拡大が読み取れる。

では、本調査地西側部分で実施された秦廃寺、麻生中下代遺跡の発掘調査成果と検討を行なう。

平成８年８月から９年３月にかけて、大阪府教育委員会により約5,400㎡が発掘調査された。５ヶ所の調査区の内、最北端の調査区を除きほぼ全面において遺構が確認されている。

時期は３期に分けられ、１期６世紀後半～末、２期７世紀前半、３期７世紀後半～８世前半である。遺構は、１期では溝、不定形土坑、２期では９棟の竪穴住居跡、溝、土坑、３期では11棟以上の掘立柱建物跡等が検出されている。また、秦寺寺域南限と見られる段が検出されている。

両調査地を比較すると、今回検出できなかった２期を除き、遺構の状況は類似する。１区は溝、不定形土坑が検出の中心であり、本調査区についても１ヶ所だけではあるが、落ち込みを検出し、不定形土坑と同様のものと思われる。また、遺構の分布が分散的であることも共通する。３期は南北方向を意識した溝、建物であり、本調査区においても東西方向の溝、やや西に軸線を振るものの東西、南北方向と推定できる建物を検出した。

この様に遺構のありかたから見ると、１，３期の秦廃寺、麻生中下代遺跡の遺構群は確実に半田遺跡にまで及んでいること、本調査地よりさらに東側に広がることが判明したのである。２期については集落規模が縮小したと考えられる。

現状では秦廃寺についての資料は乏しいが、その南側に広がる、寺院に関わる集落について新たな資料をもたらした本調査の成果は重要であると言えよう。

報　告　書　抄　録

ふりがな	かいづかしいせきぐんはっくつちょうさがいよう
書名	貝塚市遺跡群発掘調査概要
副書名	
巻次	21
シリーズ名	貝塚市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 49 集
編著者名	前川　浩一
編集機関	貝塚市教育委員会
所在地	〒597-8585　大阪府貝塚市畠中１丁目17番１号　TEL 0724（23）2151
発行年月日	西暦1999年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
貝塚寺内町遺跡	大阪府貝塚市中	27208	22	34度26分	135度22分	1998. 2. 2～1998. 2. 3	11.25	住宅建設
貝塚寺内町遺跡	大阪府貝塚市北町	27208	22	34度26分	135度22分	1998. 4.27～1998. 4.28	11.8	住宅建設
海塚遺跡	大阪府貝塚市海塚	27208	110	34度26分	135度22分	1998. 5.22～1998. 5.23	7.5	住宅建設
津田北遺跡	大阪府貝塚市津田北	27208	102	34度26分	135度22分	1998. 6. 8～1998. 6. 9	11.25	住宅建設
貝塚寺内町遺跡	大阪府貝塚市北町	27208	22	34度26分	135度22分	1998. 7.17～1998. 7.18	7.5	住宅建設
加治・神前畠中遺跡	大阪府貝塚市石才	27208	23	34度26分	135度22分	1998. 7.28～1998. 7.29	6	住宅建設
津田北遺跡	大阪府貝塚市津田北	27208	102	34度26分	135度22分	1998. 8.10～1998. 8.11	6	住宅建設
沢城跡	大阪府貝塚市沢	27208	28	34度26分	135度22分	1998. 9.10～1998. 9.11	12.6	住宅建設
森下代遺跡	大阪府貝塚市森	27208	83	34度26分	135度22分	1998.10.20～1998.10.21	5.5	住宅建設
清児遺跡	大阪府貝塚市麻生中	27208	36	34度26分	135度22分	1998.10.27～1998.10.28	5	住宅建設
東遺跡	大阪府貝塚市東	27208	97	34度26分	135度22分	1998.11. 4～1998.11.05	5.2	住宅建設
半田遺跡	大阪府貝塚市半田	27208	31	34度26分	135度22分	1998.11.19～1998.11.26	80	事務所建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
貝塚寺内町遺跡		近代			
貝塚寺内町遺跡		近代			
海塚遺跡		近世	粘土採掘坑		
津田北遺跡		近代			
貝塚寺内町遺跡		近世			
加治・神前・畠中遺跡		近代			
津田北遺跡		近世			
沢城跡		近代			
森下代遺跡		中世	溝		
清児遺跡		中世・近世	流路		
東遺跡		近代	粘土採掘坑		
半田遺跡		飛鳥・奈良時代	溝、柱穴	須恵器、土師器	

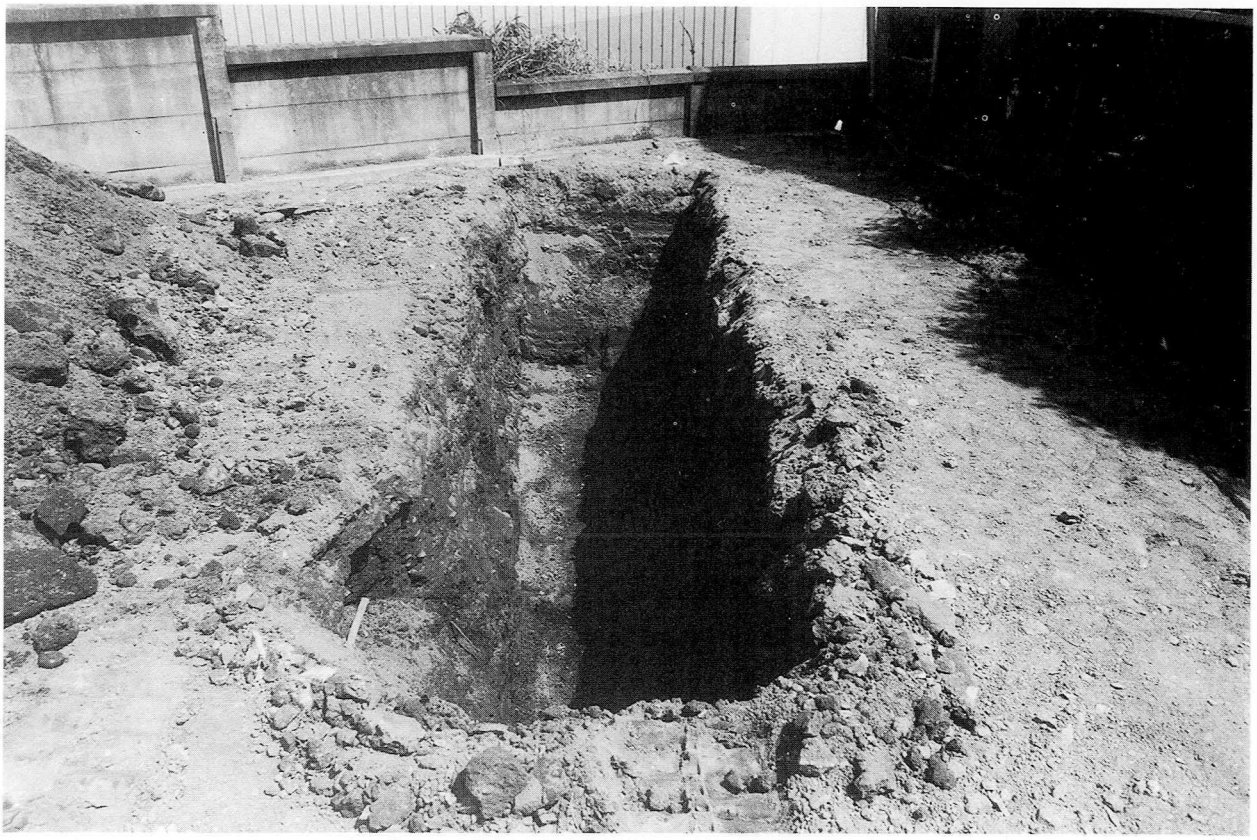
図　　版

図版1　貝塚寺内町遺跡（97－49区）

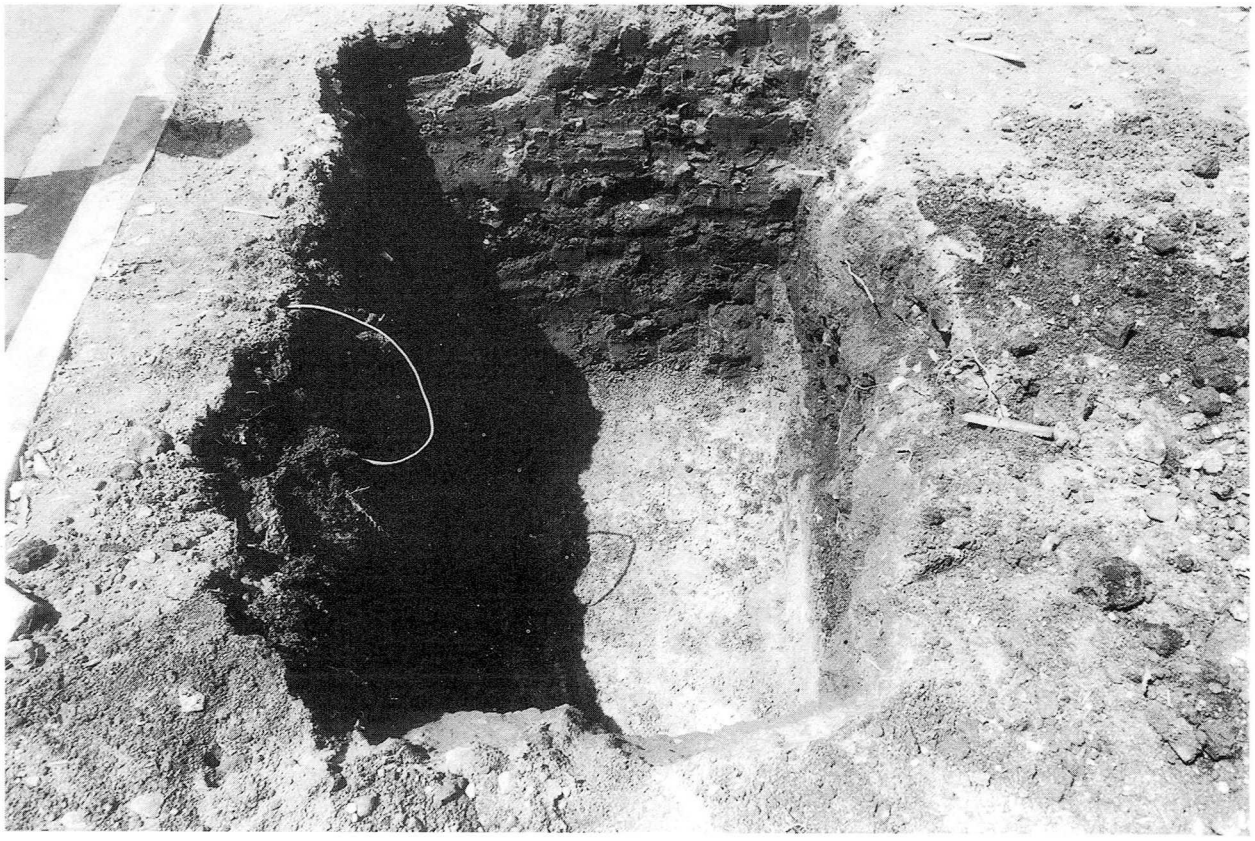
1．調査区　全景　　南東より

2．SK－2　　南西より

図版2　貝塚寺内町遺跡（98－2区）

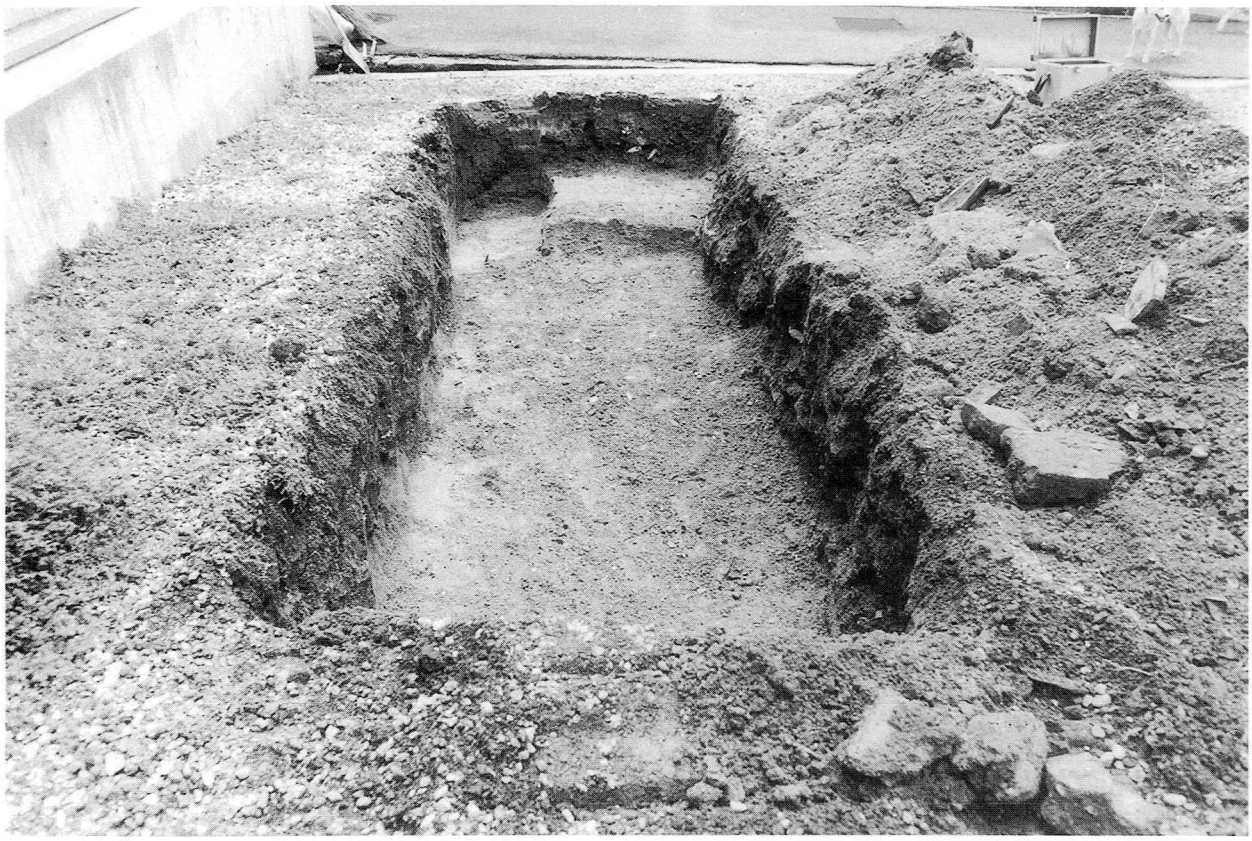


1．第1区　全景　　南より



2．第2区全景　　北東より

図版3　貝塚寺内町遺跡（98－7区）

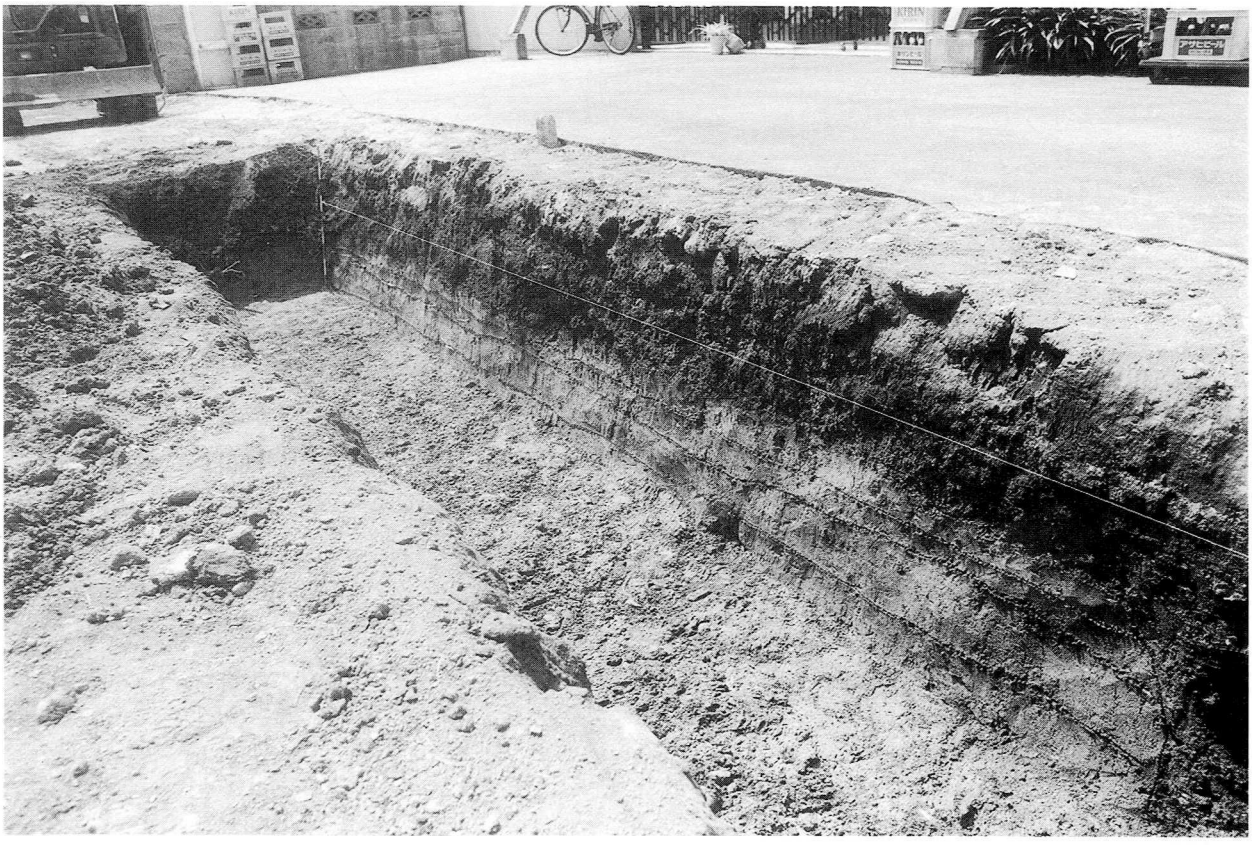


1．調査区　全景　　北西より

2．堆積状況　　南より

図版4　津田北遺跡（98－5区）

1．調査区　全景　　北西より



2．堆積状況　　北より

図版5　津田北遺跡（98－13区）

1．調査区　全景　　北西より

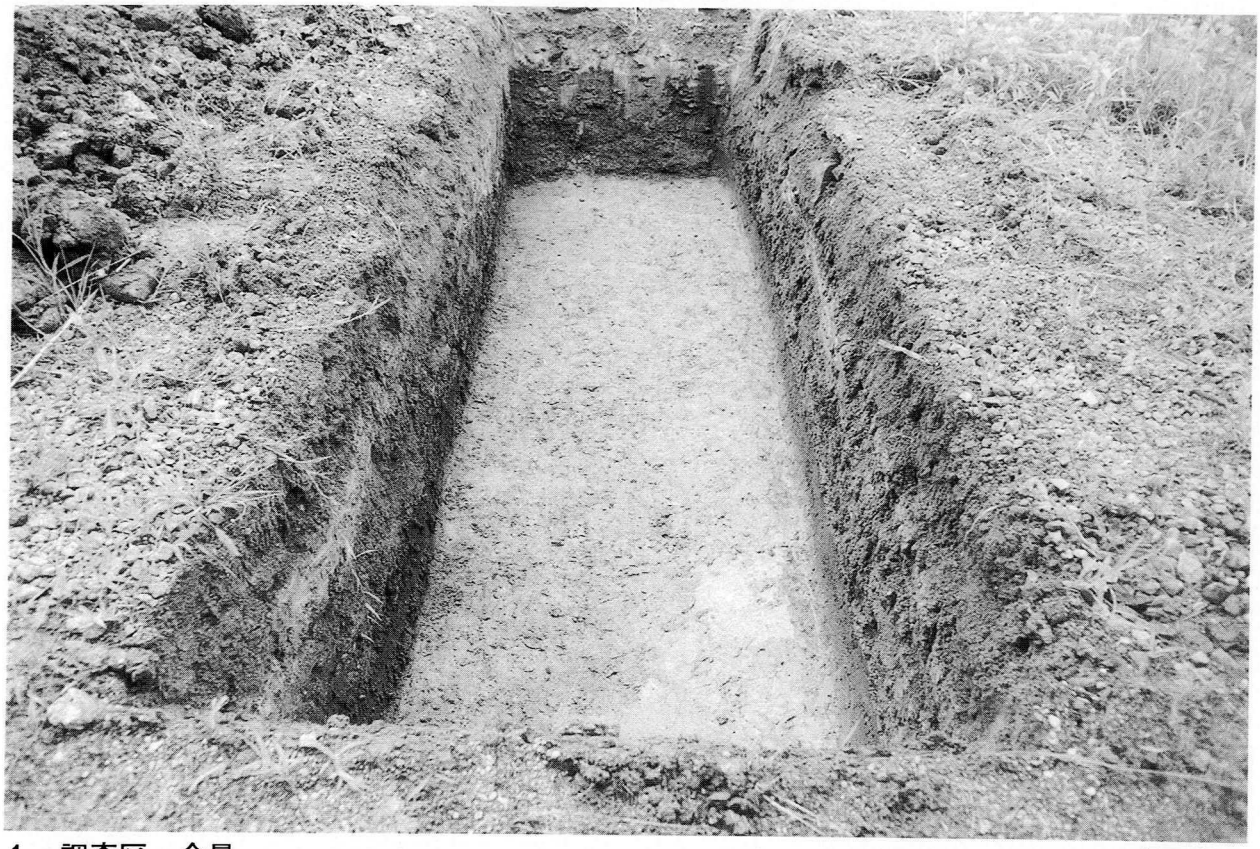
2．堆積状況　　南西より

図版6　海塚遺跡（98－3区）

1．遺構検出状況　　北より

2．遺構完掘状況　　北より

図版7　加治・神前・畠中遺跡（98－12区）



1．調査区　全景　　南西より

2．堆積状況　　北より

図版8　沢城跡（98－17区）

1．調査区　全景

北西より

2．堆積状況

西より

図版9　森下代遺跡（98－22区）

1．SD－2　　北西より

2．SD－1　　南西より

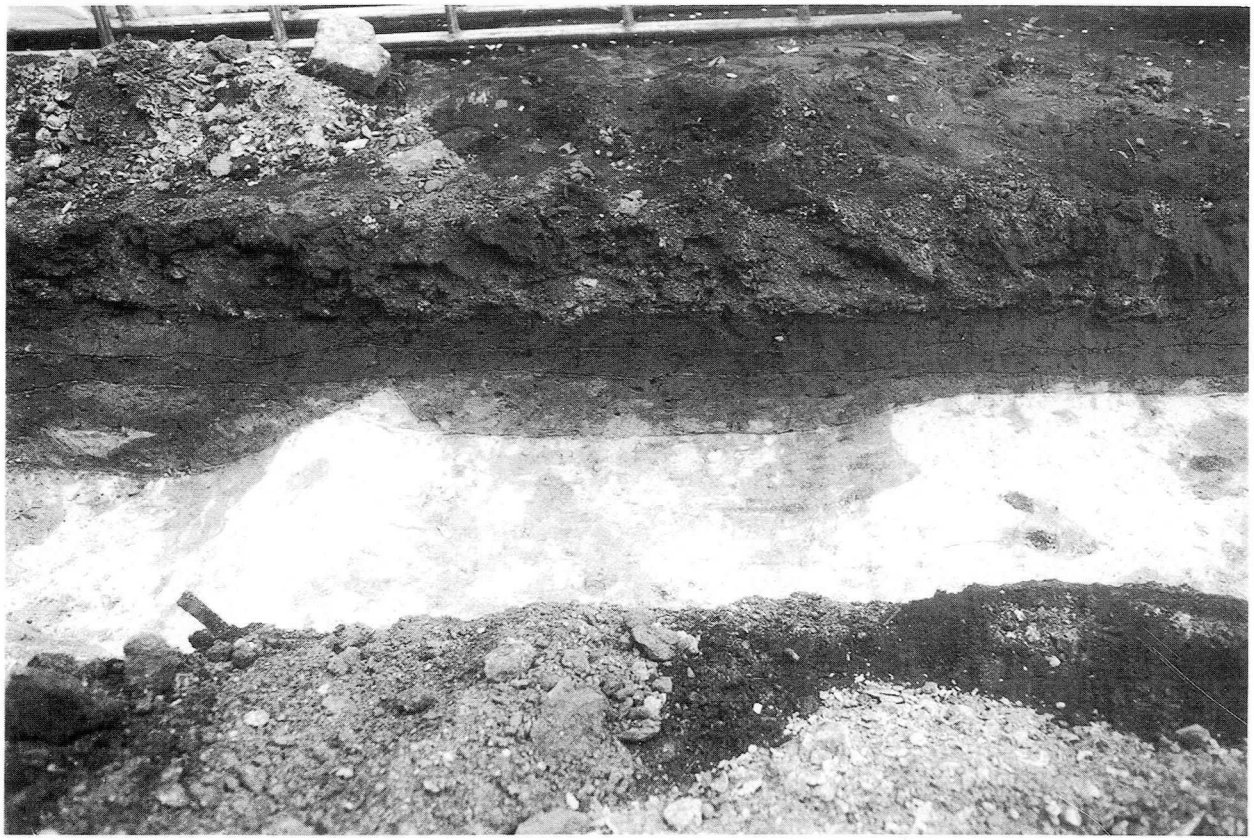
図版10　清児遺跡（98－24区）

1．調査区　全景　　南より

2．同　　上　　北より

図版11　東遺跡（98－25区）

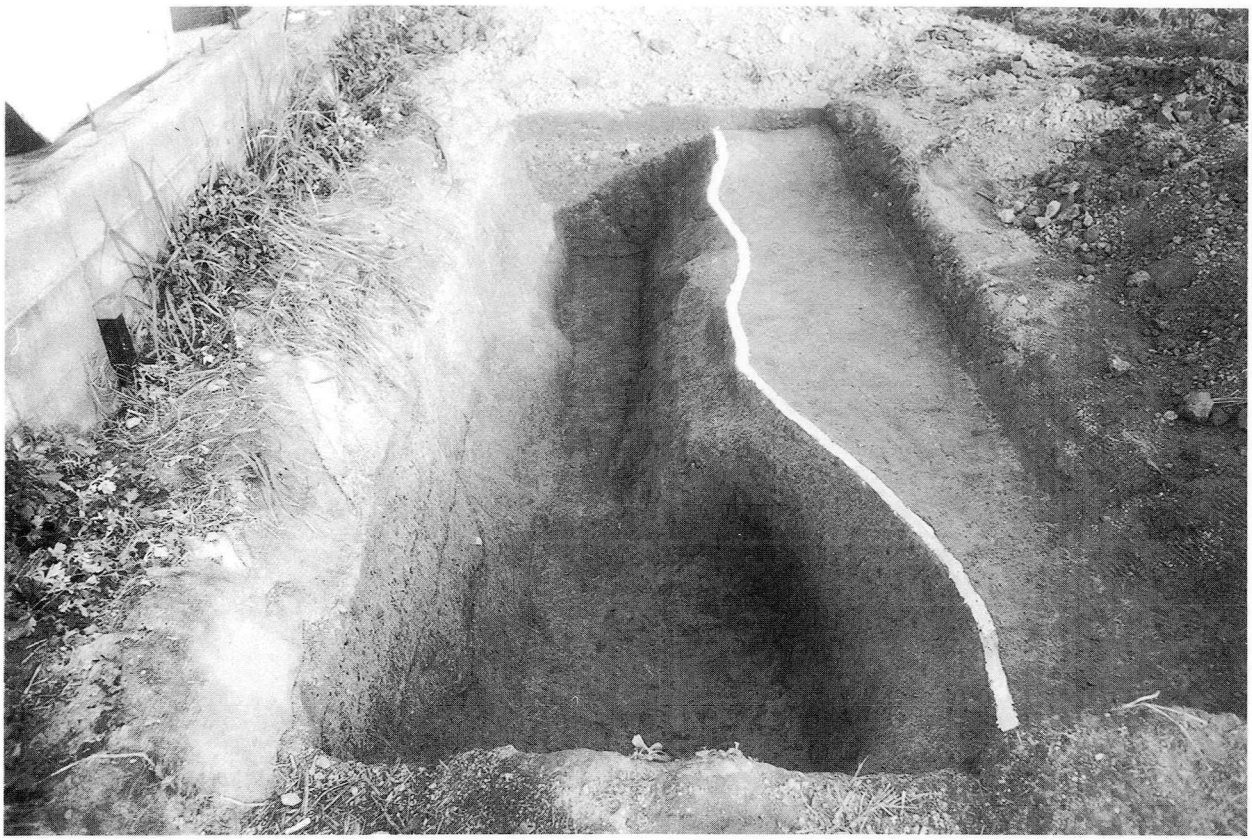
1．調査区　全景　　北西より



2．堆積状況　　南西より

1．SD－201　第2層　上面　　南西より

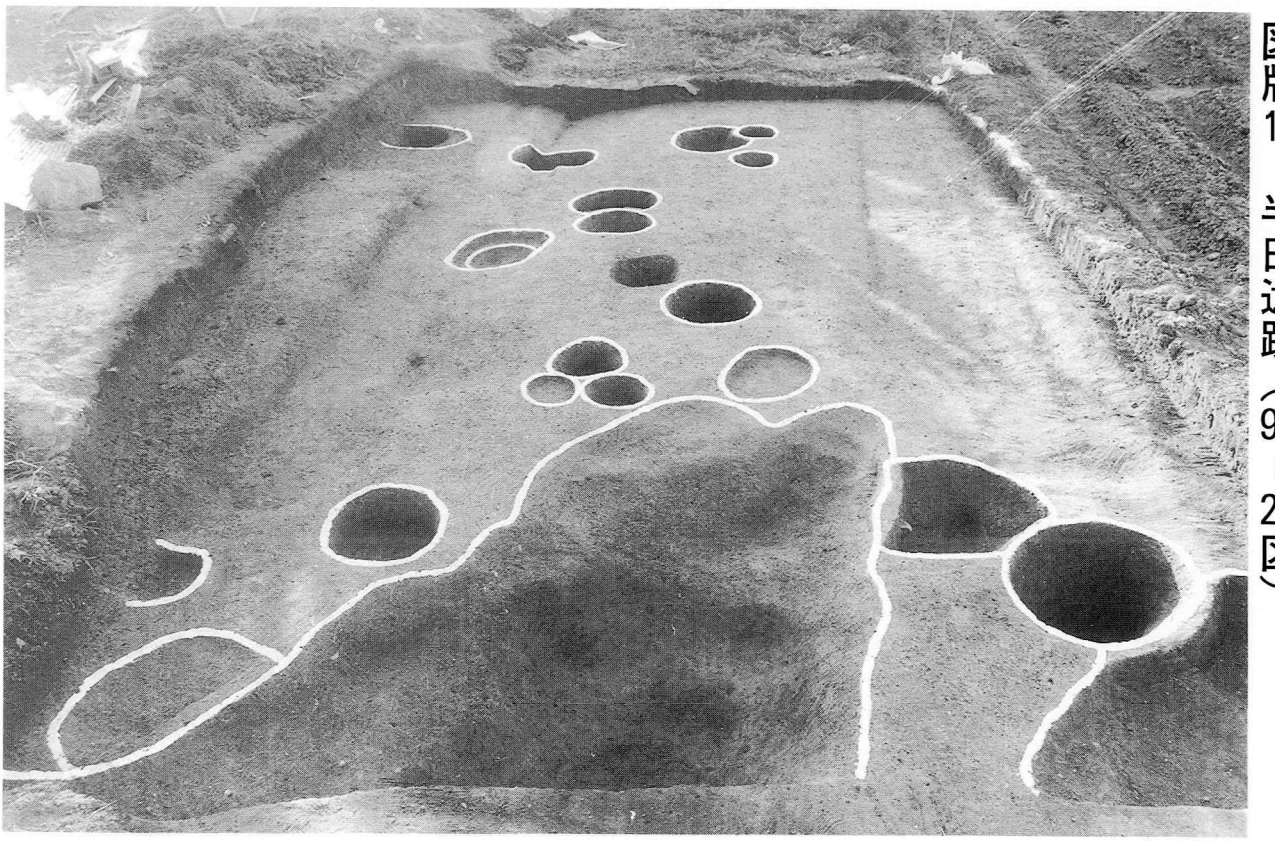
2．SD－201　第4層　上面　　南西より



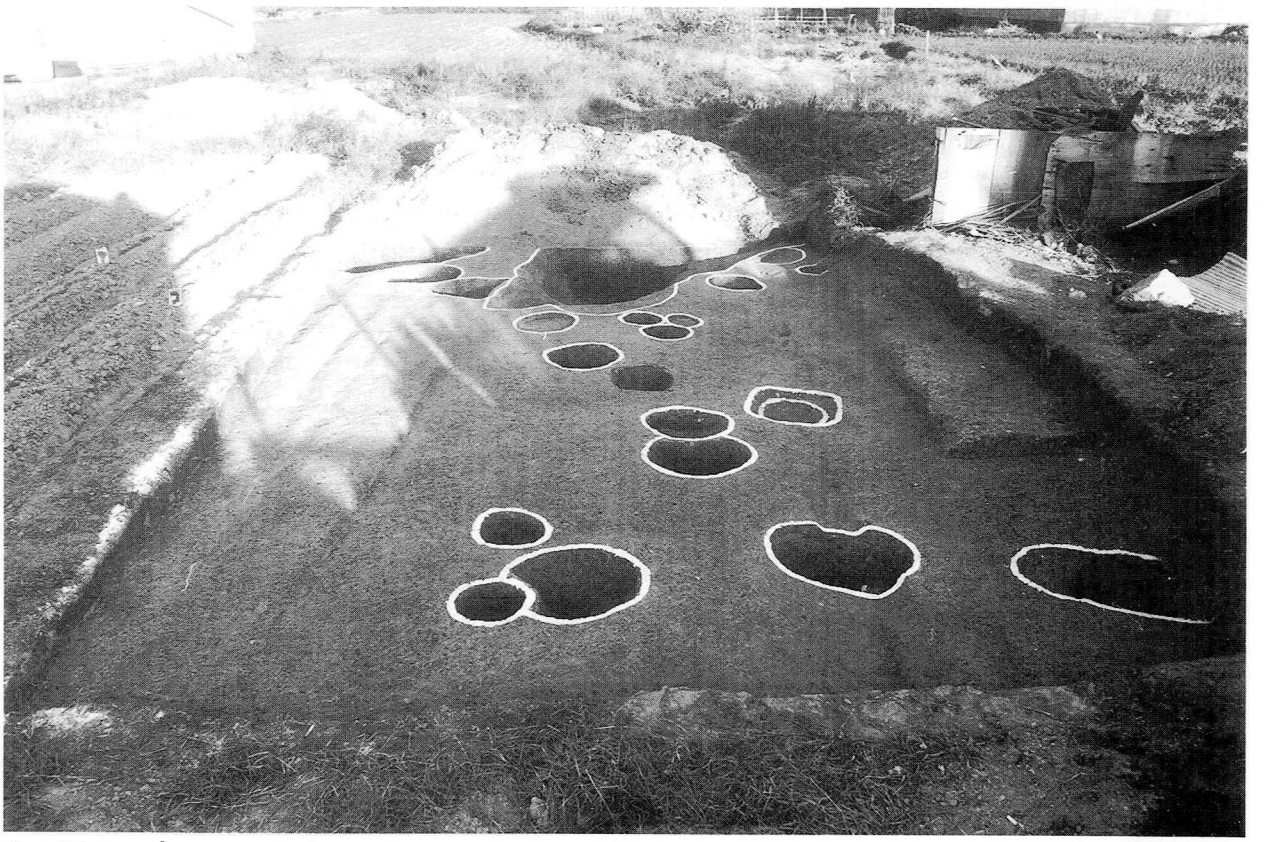
1．SD－201　完掘　　南西より

2．SD－201　堆積状況　　南東より

図版14　半田遺跡（98－26区）



1．第3区　完掘状況　　北東より



2．同　　上　　南西より

貝塚市埋蔵文化財調査報告　第49集

貝塚市遺跡群発掘調査概要21

発　行　日　1999. 3. 31

編集・発行　貝塚市教育委員会

大阪府貝塚市畠中1－17－1

印　　刷　㈲山村印刷(貝塚市近木1483-8)